
こんなもの信じるか！

澄葉 照安登

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなもの信じるか！

【Nコード】

N0340V

【作者名】

澄葉 照安登

【あらすじ】

自分では何も変わらないフツートの高校生だと思っていた清水悠喜。周りから見たらそれはとても変わっているものだったのかもしれない。

だからと言って、変なことに巻き込まれることはなかった。交友関係も少ないためだ。そこで迎えた、初めての出来事。悠喜の人生はそこから動き出した。

序文

パラレルワールドという言葉聞いたことがあるだろうか。

人間の可能性、もしあの時こうしていれば、という小さな可能性があればそれだけ未来は分岐して、たくさんものになる。

ただ、パラレルワールドと言っても。漫画やアニメの異世界とは少し違う。全く文化が違う世界もパラレルワールドの中にはあるだろう。しかし、パラレルワールドはあくまで分岐した世界。根本からすべてが違うなんて言う世界はない。何か一つや二つ、必ず自分のいる世界と同じものがあるはずなのだ。

もし、すべてが全く違う世界、真逆の世界があったとして、そこでどんな世界が繰り広げられているのだろうか。

……簡単だ。まず、生命が存在しないのだ。

単純に、足場となる元の部分さえも存在しない。ただ黒い空間だけがあるだけ。

すべてが違うということはそういうことにもなるのではないだろうか。

否定してくれる人はしてくれて構わない。これはたった一人の人間の考えにすぎない。それも頭の悪いバカな学生の考えだから。

もし今の世界を変えようと努力していても、可能性があるところまでしかたどり着けない。すべてのことを可能にできるのが人間なのだろうか？

だったら、俺はこんな場所に来る可能性を作り出した人間を恨む。たとえそれが、自分自身の存在だったとしても。

プロローグ 壱

世界は実に平和だった。平和が一番、だと思っている人も少なからずこの世界にはいる。俺もある程度その考えはある。平和すぎて退屈してしまうのは嫌だけど。

俺はこの世界の職業で学生をしているごくフツウの人間だ。性格も容姿も目立ったところは何一つないと俺は思っている。

俺の話はいい、今は世界の話だ。

最近この世界はニュースを使っていろいろな出来事を一般市民に伝えている。インターネットやラジオでもいいのだが、一番メジャーなのがテレビのニュース番組だ。

だが、近頃のニュースは何一つネタが上がってこないのか、同じようなものばかりだ。殺人事件、強盗事件、詐欺師の手口。確かにいろいろやってはいるが、俺にはどれも同じものしか見えない。

それに、俺はニュースが嫌いだった。いろんな情報を手に入れることができる便利なものだと思う人もいるかもしれない。けど、ニュースは決していい情報だけを流しているわけじゃない。むしろ悪い情報ばかりだ。何も間違った情報というわけじゃない。ただ、流れてくる情報は、不幸な出来事ばかりなのだ。

被害者の気持ちを多くの人に知ってもらいたい、そう思っている被害者もたくさんいるだろう。

でも逆に、もうその出来事については触れてほしくないと思っている人もいるのではないだろうか。

勝手にいろんなことをわかったふりしてこんなことを言っているのはわかっていて。不謹慎だと思われるかもしれない。だから学生の意見ではなく、独り言だと思っしてほしい。

ニュースは人の不幸をネタにして、視聴率だけを上げるために報道している。俺はそうとは思えない。

今のこの国の経済情報、大いに歓迎だ。むしろ知っておきたい情報

だ。

自然環境の状態。これも大いに結構だ。そのニュースを聞いて自分にできることはないかと考える人も出てくるだろう。

だが、警察がらみの事件。これは報道して何になるのかわからない。世間は物騒だとか、いろんなことに注意しなくてはならないとか、そういうことを伝えたいのはわかる。でも、被害者の言葉、被害者へのインタビュー。これだけは嫌だ。

事をより明確に知るためにやっていることかもしれない。けど、この俺の意見と同じ、個人の心境にすぎないのだから、被害者の嫌な出来事を掘り返すだけの様な気がしてならない。

これを読んで、学校の教師がどう思つかは俺には分からない。けど、決して素晴らしいものではないというのは自分で分かっている。いろんなものを批判して、それで終わりになっている。ふざけるなど言われてもいいようなものだ。

でも、こんなものしか書けないのだから仕方がない。これが自分の意見だから。

「……………お前は否定的すぎる。別に悪いとは言わないが、他人に見せる意見文ならもう少し肯定的な明るい文にしてもいいだろうに。これが高校二年生の意見文なのか？」

宿題となっていた意見文を担当に提出したところ、予想通りの感想が返ってきた。

「あくまでそれが俺の意見なんで、変えるのは無理だと思いますけど？」

学ラン姿の俺はいつも通り答える。

「……………お前は変わってるよな、清水」

よく言われる。自分では変わったところなど一つもないと思っているのに、たいていこういう意見文、論文みたいなものを提出すると言われる。訳が分からない。

ちなみに、清水というのは俺の苗字だ。下の名前は悠喜、清水悠喜だ。しみずはるき

名前の由来は、俺は長男なので生まれたときに悠長はるかい時間を喜びで満たしてくれた存在だからだそうだ。『遙か』という字の方がいいのではないだろうか？

「先生にそういわれるのは久しぶりですね」

「最近はこのいう意見文はなかったからな。この個性的な意見がなければお前は結構優秀な人間なんだぞ」

「先生が一人の生徒に向かって優秀だというのはもはや励ましにか聞こえませんよ」

先生は「変わってるな」ともう一回呟いてから。俺から受け取った意見文をもう一度読みながら去って行った。

廊下にいつまでも突っ立っているのはおかしいので教室に戻ることにする。十二月だから寒いしな。

教室にはいったところで、話す相手も一人しかいないのだが……。

「悠喜、どうだった意見文の評価は？」

俺とは違って、明るい声でしゃべるこの女子、俺のたった一人の駄弁り仲間の中川風美なかがわかすみ。容姿、性格ともに男子受けがよいであろうに、なぜか俺の相手ばかりしている変わり者だ。俺なんかよりもよっぽど。

しかもこいつとは苗字ではなくちゃんと名前で呼び合っている。ほんと、何かがおかしい気がする。

「いつも通り、変わってるって言われたただけだ」

「あはは、さすが変わり者だね」

こいつには言われたくない。いつたい俺のどこが変わってるんだ？ クラスの奴らもみんなそういうし。交友関係を持つとしないのはそんなにおかしいのか？

「でさ、いきなり話しかけた理由なんだけど。今日の放課後空いてる？」

「理由はちゃんとあるわけな」

放課後とか、何だ？ 俺に説教でもする気なのか？ 少しはちゃんと現実を見なさいとかか？ 昔言われたな！。アニメばかり見

てたら。だってそれしかやることがなかったんだからしょうがない。
「空いてるには空いてるが？」

「じゃあ、一緒に買い物にでも行かない？」

「お前友達誘えばいいじゃねえか」

こいつは俺と違ってちゃんとほかにも友達がいる。仲のいい友達と行けばいいだけのことだ。男の俺と行くよりも、同じ女子同士で言った方が絶対に楽しいだろう。

「気軽に誘えるのが悠喜しかいないんだって」

「別にフツの買い物くらい女子誘っていけば――」

「アニメ系のお店だからさ」

……確かに、それならそういう話が分かる人じゃないと連れて行けないだろう。だから俺なのか。女子の中にもいそうだけだな。そういう話を分かってくれそうなやつ。

「別にいいけど、時間は？」

「放課後すぐにこのまま行くよ？」

そうか。俺はたいいてい家に帰ってから出かけるのでその発想がなかった。寄り道なんてしないしな。する理由がない。

「俺は金持ってきてないぞ」

「じゃあ自転車の二人乗りで行けばいいじゃん」

と、即座に解決。バスの料金とかは心配ないみたいだ。じゃなくても、俺は何も買わないのに店に行くのはどうかということだ。まず店の場所知らん。

「とりあえず、放課後に先に帰らないでよ」

「分かった」

と、返事を返すと風美は自分の席に戻っていった。

俺は黒板の上に設置されている時計を確認。次の授業まであと二分くらいか。寝たふりしておこつ。そうすれば少し授業さぼれる。

そういうことにして俺は席に着いたとたんに机に突っ伏した。
しばらくすると本当に寝てしまっていた。

zzz……

起きたら結構時間が経っていた。っていうか、昼飯の時間だった。俺が寝たのは一時間目が終わって二時間目に入る前の十分休みだったはず。なんだ？ 教師は誰一人俺を起こさなかったのか？ まあ、もう既に見捨てられてるのかもな。意見文で相当目つけられてるしな。仕方ないか。

昼飯の時間か。面倒なことにこの学校には昼飯の決まりがある。教室の中で昼食をとること。高校生にもなつてなぜ教室で食事をせにやなんのだ。屋上——この学校は立ち入り禁止だが——とか、中庭のベンチ——この学校にそんなごめる場所は存在しないが——とか、いろいろあるだろうが！ おかげで俺は教室の友達と飯を食うことになるんだぞ。

「コンビニのサンドウィッチですか。自炊とかしないの？」

俺の友達は先ほど言った通りこいつだけ。風美よ、お前はなぜ俺にかまってくるんだ？ 俺に気があるのか？ などとくだらないことを思っても口には出さない。……いや、口にだしと方がいいのかもな。もしかしたらそれがきっかけでこいつとの仲が気まずくなくて一人で静かに過ごせるかもしれん。

と、思っても、結局口には出せない。俺はヘタレだな。

「自炊とかめんどくさいだろ。お前はその弁当自分で作ってんのか？」

と、俺は風美が左手に持っている弁当箱を指して言う。こいつと弁当を一緒に弁当を食べ始めて、初めてまともな会話につながりそうだ。いつもはアニメがどうか、ラノベがどうかばかり話題にしてきやがる。

「たまに自分でやるけど、ほとんどお母さんが作ってくれるね」
ほらな、自炊を毎日する学生なんかそうそういないって。な、そう思うだろ？

と、俺は心の中で……俺は心の中でいろいろするのが好きだな。ほかにやることがないのか、と自分でツツコミたくなる。

「フツー自炊なんてやらないだろ？ だから簡単に学校の前のコン

「ビニで飯買ってくるんだよ」

「そういうもんかな？ 自炊とかやってる男子は女子のポイント高いと思うよ」

「俺が女子のポイントを高めても意味がないぞ。女友達はお前しかないんだから」

「パラメーターあげるのは基本中の基本でしょ？」

「あつ、やっぱりそういう話になっちゃうのね。まあ、いずれはそっちの話に入るだろうとは思ってたよ。」

「恋愛ゲームでもそうでしょ。まずはパラメーターあげてなおかつストーリーを進める。そうすればヒロインだつて増えてくるよ」

「つまり今のところヒロインはお前だけってことだな」

「え？ あ、あたし？ や、やだな、そんなヒロインとかじゃないよ」

「うん、十分わかつてる」

と、俺が一言。ま、この時点で発言をミスったとか思えばいいんだけど、そんなことはわからないバカ野郎なんだ、俺は。

「うう……。悠喜はキツイよ。せめてもうちょっとオブラートに包んでよ……」

「俺は何かキツイ発言をしたか？」

全く気付かない。いや、本当にわかんないんだから仕方がない。バカ野郎だつて言われてもわからないものはわからない。説明を求む。

「どこがキツイ発言だった？」

「えつ、あ、その……。そ、そういうのは自分で気付けないといけないんじゃないかな！」

あ、何かわかんないけどごまかされた。いったい何をごまかされたのかすらわからないけど、何かをごまかさせた。

たまに風美はこんな風にごまかすことがある。毎度何をごまかそうとしてるのかわからないんだが。なんか訊かれたくないことらしい。

「まあ、とにかく！ 恋愛はパラメーターが大切だよ！」

何かわからないけど、注意を受けた。なぜに恋愛？俺にそんなこと起きるわけないだろ。静かな人生を送って聞けばいいんだ。

恋愛は、しなくていい。

べつに過去がどうかというシリアスなことがあるわけでもないからな。興味がないだけだ。高校生としてはすこし特別なことかもしれない。……やっぱり俺は変わってるのか？

午後の授業もいたって平凡に終わり、放課後を迎える。平和だとか平凡だとか言う言葉をよく使っているが、そういうことをよく言うとかいてい変な出来事に巻き込まれるんだよな。でも、リアルではそういうことはないから心配ないんだが。

放課後は約束通り風美のショッピングに付き合う。ショッピングと言っているもののなか少々疑問だが。

で、あいつは朝、自転車で行くとか言っていたが、残念なことに俺は自転車で登校しているわけじゃないので学校に俺の自転車はない。「だったら悠喜がこいで、あたしが後ろに乗ればいいんじゃない？」

というさも当然だと言いたそうな意見を通した風美は現在、俺のこいでいる自転車の後ろに乗っている。自転車はもちろん風美のものだ。これは警察に見つかったらやばいんだがな。最近はやホンで音楽を聴くのすらダメになってしまったからな。

俺は北風が吹きつける道路を自転車で進む。学ラン着てるけど寒いな。

だが、背中妙に暖かい。なぜかは簡単なことだ。俺の背中に風美が抱き着いているからだ。まあ、二人乗りすれば自然な体制なのかもしれないな。それにしても風美は体温高いな。カイロの代わりになる。その分前からの風が余計に冷たく感じるのだが。

しばらく道を進んで交差点で止まる。

「どっちだ？」

「まっすぐ」。駅まで行っちゃっていいよ」
信号が変わるのを待って、まっすぐ進む。

しばらくそうやって駅の方まで進んでいった。

ブローグ 式

そして駅を少し過ぎたところにあるアニメショップに入店。ここは五階建てのビルの地下。そこには駐車場ではなくアニメショップが構えられている。結構大きい。

俺はアニメを見たりするが、こういう店に来るのは初めてだった。外出をめんどくさがってしない人間だからな。将来は二丁にもなりそう。いや、引きこもりだ。

ちなみに、俺と一緒にここに来た風美は……。先にどこかに行ってしまった。意外に広いので、ところどころ死角もある。

仕方がないので俺は漫画が置いてあるコーナーで物色を始める。漫画はある程度買っているので、続きが出ているなら買う。といっても、最後に漫画とかの面白い物に来たのは約一年前だったかな？ だから結構続きが出ているだろう。

と、俺が横歩きに進んで本を見てみると、早速見つかった。やっぱり結構出てた。これは買うかどうか悩む。ここで買わないと次に買いに来る機会がいつあるのかわかったもんじゃない。まあ、悩んだところで金がない俺にはどうでもいいことだ。

次はライトノベルのコーナー。ちゃんとコーナーが分けられているのは見やすくていいな。

俺は適当におもしろそうなタイトルの本を手にとっていく。

ライトノベルことラノベは絵がオタクっぽいとか言う理不尽な意見で一部の人間から嫌われていたりする。一回読んでみればわかるのだ。おもしろいと。

おっ、俺好みのタイトル発見。いかにも俺の意見が採用されてそんな主人公設定だ。

と、タイトルを見て、背表紙を見て、元あった場所に戻す。金がないんだ。

「やっぱり本が気になる？」

と、俺のすぐ後ろから声が聞こえた。どうやら風美が戻ってきたらしい。俺は振り返る。

「……………」

何というか、金は大丈夫なのか？ という感じだ。クリアファイルやらキーホルダーやらが大量に抱えられている。それにカードゲーム用のカード。

「……………そんなに買ってどうするんだ？」

と、俺が指をさしたのはカードゲームの方。なぜか？ 箱買いなんだよ。なんでそんなに大量に買い込んでるんだよ。

「あゝ、これ？ だって、サインカードとかほしいじゃん？ だから箱買い」

そうか、そこまで好きなんだな。好きなものがあることはいいことだと思う。何も関心がないよりは。

「なんか買ってあげようか？ 無理やり連れてきちゃったんだし」

「いや、いいよ。お前は自分のを買ってこい」

友達とはいえ、他人に買ってもらうのは気が引けた。友達だから他人じゃないでしょ？ といつだか言われた気がしたが。他人だからしょうがない。

「じゃ、買ってくるよ」

そう言ってレジに向かう風美。アニメの話をしなければ感情が高ぶったりしないで、フツの物静かな女の子なんだろうけどな。勿体ないな。

と、柄にもなく変なことを考えてしまったので首を振って雑念を払う。

こんなことを考えても仕方がないんだから。

すぐに風美がレジから戻ってくる。並んでる人がいなかったのか？ 買い物ってというのはもっと時間を浪費するものだと思っていたが。

「買い終わったよ。それじゃあ、次はどこ行く？」

「まだどこか行くのか？」

「だからそれを聞いてるんじゃない」

俺に聞いてるのか？ てつきり心の中の自分に聞いてるのだと……。そんなことをするのは俺くらいか。

でも、俺はこのままどこかに行つたとしてもやることがないぞ。公園とかでぼけーつとしてるくらいしかない。ゲーセンなんて金がかかるので論外。それと同様の意見でほとんどのことが却下。公園しか残らないな。でも寒いからなし。

……じゃあ、残つたのはこれだけだ。

「帰る」

俺は自転車をこいで家まで戻つた。持ち物は自分のスクールバック、あと……

「へー、ここなんだ」

同級生の女子一名。なんかお持ち帰りしてきてしまった。全く、俺は一人で家に帰るという意味だつたのに「じゃあ行こうか、悠喜の家」ということになってしまった。

家に友達上げるなんてずいぶんと久しぶりだな。中学の受験シーズンの勉強会以来だな。みんな受ける高校違つたくせに集まつてたな。結局勉強なんてしないでテレビゲームだとか、トランプだとか、マンガ読んだりしてたな。

でも、女子を家に上げるのははじめてだつた。だから俺の親は、「ど、どうも。うちの息子がお世話になってます」

と、母さんが頭を下げ、

「おにいちゃんの彼女？ イガイー」

と、驚く妹。

俺の家は一軒家に四人の人間が暮らしている。俺と母さん、父さんに妹。高校生になつたんだから一人暮らしもいいと思つたが、家事がめんどくさいことに気付いた。ということで四人で暮らしている。

「妹の清水七海です。兄がお世話になってます。えーと、お姉さん

？」

「なんだかいろいろすっ飛ばしたらお姉さんになるのだろうか、安心しろ、その予定は毛頭ない。こいつはあくまでただの友だ――」

「よ、よろしくね！ 七海ちゃん！」

「そうかそうか。もう下の名前で呼ぶのか。まあ苗字は全員清水だからしょうがないな。」

それにしても初対面で俺の妹の天然をいとも簡単にスルーできるとは。結構相性いいかもな、この二人。

「っていうか、なんで七海が帰ってきてるんだ？ 中学生なんだから部活があるだろう。確か美術部かなんかに入ってたはずだが……。そっいえばあの中学の美術部、あんまり活動してなかったな。」

「……俺の部屋でいい？」

「あ、うん。どこでもいいよ」

と言われたので二階の自分の部屋に向かう。

「母さん、お茶とかいらさないから」

「分かったわよ、ふふふ」

最初にくぎを刺しておかないと絶対に持ってくるからな。っていうかなんだその笑いは。俺の妄想かもしれないが「若い二人の邪魔はしないわよ」的な言葉が含まれていた気がするんだが。

とにかく、そんなことは気にせずに階段を上がって三つある部屋のうちの一つを開ける。

「あんまりいろんなものは置いてないので、代表的な男子の部屋！ みたいなことにはなってる。いまどきは結構男子も掃除とかこまめにやってるだろうしな。」

「へー、意外。アニメのポスターとか貼ってないんだね」

「そんなの貼ってたなら今頃俺は親から奇異の目で見られていただろうな。俺の部屋は壁は壁紙とカレンダーしか貼ってない。フツーはこれくらいだろう。」

机の上とかも教科書と黒いケータイゲーム機が置いてあるだけだ。シンプルというよりはこざっぱりしていると自分でも思う。本棚は

一応隙間なく埋まっているが。

「悠喜って綺麗好き？」

「いや、ものが少ないだけだろ」

片付けるものがまずない。

「まあ、女子からしたら少ないかもしれないけど……。男子ってこれくらいじゃないかな？」

そうでもないと思うぞ。壁にネックレスとかがぶら下がってたりすると思うぞ。ワックスやらスプレーであふれてると思うぞ。俺の友達がそうだったから。

「で、特に珍しいもんは何もないが、なんかするか？」

と、ひとまず提案。友達といるのに何もしないのはないだろう。かといって、そこまでやれるレパトリーが多いわけでもないので難しい要望には答えられない。

「ゲームでもする？」

ずいぶんと女らしくない提案をするな。女っぽい提案をされても対応できなかっただろうけど。

「別にいいけど、テレビゲームは一階だぞ」

「これこれ」

と、風美は俺の机の上にあるゲーム機を指さす。

「お前今持つてるのか？」

俺の家にはこのゲーム機は一つしかない。よってできるのは一人だけということになる。

風美は自分のスクールバックの中をあさり始める。そして俺のゲーム機と色違いの青のゲーム機を取り出す。

「とりあえず音ゲーでもやろうよ」

とりあえず通信をする。

音ゲーというのは音楽に合わせてボタンを押したりするゲームのことである。なんてほとんどの人が知ってるだろうけど。ゲーセンにもよくあるやつだ。

「まずは一曲目」

音楽が始まる。いかにもキャラクターソングだぜーって感じの曲だ。結構いろんな曲配信してるからな、このゲーム。

これくらいならぎりぎりクリアできるレベルのリズムだった。あんまりこういうのはやんないからそこまで得意ではない。

で、二曲目が始まったんだけど。ロックじゃん。ロック調全開じゃん！

あ、難しい！ 風美は涼しい顔でやってるし。やりこんでやがるな！

「悠喜はこういうのあんまやんないの〜？」

風美がこつちに目線を向ける。あんまり必死にやってもダメだ。いったん流して落ち着いたところから入ろう。

「ゲームをつけたのが久しぶりだ」

帰って宿題やって寝る。これをひたすら繰り返してたからな。夜中に起きて深夜アニメを見てまた寝る。も、たまに入ってる。

墮落しまくりだ。

「悠喜は、なんかやりたいこととか無いの？」

やりたいことか。高校生だからやりたいことくらい見つけろって言われるけど。やっぱりやりたいことはないかな？

「とくには」

「恋とかしたいと思わないの？」

「まったく」

これは即答。恋をして、なんか変わるのか？ いろいろ世界を見る目が変わるとか言うのを聞いたことがあるが、あんまり興味がわかない。それに恋って、したいって思うもんじゃなくて、気付いたら恋してた、っていうのじゃないのか？

「そっかー。悠喜は女子とかかわりなんて持たないしね」

「まずお前とかかわりを持つてることにも驚きなんだがな」

「男子ともあんまりかわらないしね」

「変わり者らしいからな、俺」

淡々と答えていく。この質問に何か意味があるのかどうかかわらないが。

「じゃあさ、あたしといて楽しい？」

「楽しくなかったら一緒にいないっての」

「そう。だったらもつといろんな人とかかわった方がいいよ。悠喜は一人が好きじゃなれないんだから」

独りが好き、か。そういう人もいるんだろうな。でも俺は、静かに一人でいたいとか言っておきながら、結局は誰かと一緒にいることで安心してる。

たくさんの人とかかわりを持つことは、素晴らしいことなのだろうな。きつと。

でも、

「俺はお前とだけこうしてられればいいかな」

「へー？ ど、どういうこと！？」

「いや、そのままの意味」

どうした？ 急にあわてたりして。あ、もしかしてまたなんかミスったのか？ 一体何をミスってるのか自覚しないとやばいんじゃないか？ 自覚しててやってたら余計たちが悪いけど。

「たぶんまたミスったんだろうから言うけど。ほかの人間とかかわりを持たなくても、今のところは問題ないし。こうやってお前といれば楽しいからさ」

「だ、だからそれってどういうこと？」

上目使いで聞いてくる。

どうって言われても……。そのままの意味なんだが。仕方ない。もう一回一言で言おう。

「お前以外のやつといなくても構わないってことだ」

と、俺が言つと、なぜか風美は顔を赤くしてうつむいてしまう。どうしたんだ？ わかりやすく簡潔に言っただが……。逆にわかりにくかったか？ じゃあどういう風に言えばいいんだよ。

俺は風美の顔を覗き込む。が、なぜか顔をそらされてしまう。どうしたんだよ。

っていうか、ゲームもう終了のサイン出してるじゃん。気付けっ

て。

「風美ー。意識跳んでないかー？」

俺は風美の肩に手を置いて軽くゆする。

「あつ、ごめんごめん！ ちょっと動揺しちゃってさ」

いつものことながら、動揺するきっかけは何だ？

「とりあえず、お前時間とか大丈夫なのか？ 結構暗くなってるけど」

そう、六時間授業を終わらせて、買い物にも行つて、そのあとここに来た時点でもう結構暗くなっていた。女が一人で出歩くのはさすがに……。

「あ、うん、じゃあそろそろ帰る」

と言つて、風美は鞆にゲームを入れる。

「悠喜つていつも何時くらいに家出るの？」

「ん？ 学校からそんな離れてないから、八時十分くらいだ」

学校が始まるのは八時三十分から。遠い人は七時とかに家を出るんじゃないか？

「分かった。じゃあ明日八時にここに来るから」

「ここ？ 俺の家につてことか？」

「そういつことつ。じゃあ明日ね」

そう言つて風美は階段を下りてとつと家を出て行ってしまった。

にしてもなんでいきなり明日来るなんて……。登校まで一緒にしようつてことか？ 悪いうわさが流れるだらうけどな。

ブローグ 参

そして、朝を迎えるわけだ。ちなみに今日の起床時間六時五十分。早起きだなー、我ながら感心する。朝飯は……昼飯と兼用。結構きつい。

とりあえず今日は風美が来るとか言ってたから、先にコンビニに行って昼飯を買っておこう。ついでに久々の朝飯もだ。

俺はまた着替えるのは面倒なので制服に着替えて、靴を履いて外に出た。朝は余計寒い。

そういえばあと一か月くらいで俺、誕生日じゃん。また年取るのか！。

と、そんなくだらないことを思いながら制服のズボンのポケットに手を入れて歩く。

朝は道路に誰一人いない……なんてことはない。結構犬の散歩だったり、ランニングだったり歩いてる人はいる。車だってそこそこ行きかっている。

ただコンビニはそこまで混んでない。この時間だからな。学生が登校する時間とかの方が繁盛するだろう。

俺はコンビニでサンドウィッチと朝飯の鮭おにぎりを二つ買ってレジ袋に入れてもらう。

エコバックとかいうものは持ってないので毎回コンビニで袋をもらっている。

今食おうかと思ったが、家に帰ってからでも十分時間があるので家に帰ってからにすることにした。そういえば風美の奴、家はどこなんだ？もしかしてわざわざ遠回りするような道になるんじゃないだろうな。もしそうなら来なくてもいいんだが。

俺はあくびをしながら家に着く。まだ七時になったばかりだ。それなのに……。

「風美？　なんでお前こんな時間に？」

「あれ？ 悠喜？ なんで家の中からじゃなくて外から現れるの？」
二人とも質問しちやダメだろ。まずはどっちかが質問に答えないと。
「俺は今コンビニに行ってきたんだ。で、もう一回訊くが、なんでこんな時間から俺の家の前にいるんだ？」

「昨日来るって言ったじゃん」

そうだな。確かに言った。けどな、風美、

「こんな時間じゃなくてもいいだろ。まだ一時間もあるぞ」

今は七時だ。俺がいつも家を出る時間は八時十分だ。つまりお前は
フライングをしすぎなんだ。わかったか？

「早く来るぶんには問題ないでしょ？」

「こつちが気使つだろ、全く。とりあえず家は入れ。外よりは暖かいはずだ」

そう言つて自分の家の玄関を開ける。

「え？ でもこんな朝早くから——」

「お前は自分の行動を見てから発言しろ！」

朝早くに訪ねてくるのが悪いと思うなら訪ねてくるな！ くそ、まだ眠い。

とりあえず風美は家に上がってもらつて、俺の部屋に来てもらった。そして俺は眠いので寝よう、と思つたのだが、こんな時間に俺の家に来た風美もしっかり寝てないんじゃないだろうか？ という
ことで風美を俺のベットで寝かす。

俺は床で毛布を使つて寝た。制服のまま。

zzz……

そのあと、きつちり一時間後に俺は起きて、ぐっすりと眠つてらつ
しやつた風美さんを丁寧に起こして、学校へ行く。

風美はよく寝れたようでしたと歩いていて。一方俺は若干ふら
ふらしていた。床で寝るところなるらしい。気を付けろよ。

横断歩道を渡っている途中、信号機が点滅し始めた。……いや、も
しかして俺の視界の方がやばくなってる？ なんてことはなく普通
に信号が点滅してただけだ。

風美は俺よりも先にわたりきってしまったている。元気やわあ。

でも、その元気なところがいいんだろう。いや、よかったんだろう。そのおかげで、居眠り運転のトラックに体当たりされることはなかったんだから。

俺以外の人間は走って横断歩道を渡る。俺はその理由が分からなかった。そして風美が指さした方向を見て初めて理解した。トラックが突っ込んできた、と。

俺は吹っ飛ばされるだろう。居眠り運転の運転手。被害者出たぞ、どうすんだ。

なんて冷静に心の中で言ってみたものの、俺がはねられる事実が変わらない。

こういう時、奇跡的に無傷で助かったり、けがをしたとしても記憶喪失とか、そんな小説みたいなことだろう。なんて思えなかった。むしろそれを全部否定した。不死身の体だったら、リアルでバカなことは起きない。美少女が助けてくれる？ 都合のいいことは簡単には起きない。

そうやって否定しているうちに、俺とトラックは触れる寸前のところまで来ていた。

ああ、死ぬ前には走馬燈が見えるとか言ってたな。だから見えるのか。こんなものが。

風美が半泣きで俺の名前を叫ぶなんて言う光景が。

あれ？ 走馬燈って過去の記憶がフラッシュバックするってやつじゃなかったか？ じゃあ、これはもしかして、現実なのか？ だとしたら、少しうれしいかもな。風美は俺のことこんな風に『涙を流す』なんて感情的なことをやってくれたんだから。

俺が体験する初めての死は、とても心に響くものだった。

俺のトラック側にある手——右手がトラックに触れた。

……という夢を見た。いや、そう簡単に事故になんて遭わないって。そうやって油断していると遭うんだろうけど。っていうか、何だあれ

は。俺はいつたい何がしたかったんだ？　なんで俺喜んでたんだよ。うれしかったんだよ。……やっぱり人間は一人であるより、信頼できる誰かといった方がいいとかいうやつか？

俺は起き上がる。ベットに座っている状態だ。シンプルな部屋。俺の部屋だ。

なぜか夢のせいで自分の今の状況を確認してしまう。結構リアルだったからな。

いろんなものが俺の部屋にもともとあるものだ。それは正しい。

それじゃあ……

同じベットで寝ているこの女の子は誰なんだ？

いや、昨日はこんな女の子をお持ち帰りした記憶はないんだが……

……。俺がお持ち帰りしかけたのは確か風美だったはずだ。それとも風美だと思っていたのが実はこの子で、昨日は俺の家に泊まったということか？

……。ないな。この世界でそんなことが起きるはずがない。まず、こんな美少女が目の前にいたらたぶん忘れないだろう。希少種なんだから。

布団に隠れててわからないが、髪の毛は相当長いんだろう。たぶん腰くらいまである。あくまで予測だが。

顔は布団から出ているのでよく見えるが、そんなにまじまじと見なくともいい。美少女。それだけで済む。けど外国人の血が流れてるってことはなさそうだ。顔立ちからして日本人っぽいし。

まあ、とりあえず、俺はこんな女の子は知らないわけだ。

となれば、考えられることは一つだけだ。

「不法侵入だ」

俺は枕元に置いてあるケータイを手に取るために布団から手を出す。枕元って言っても手を伸ばさなきゃとどかない。

と、俺がそんな風に手を伸ばしたのだが、そうしたら布団がずれ

落ちた。……あれ？ 違うな。なんか引つ張られた。

俺は布団が回収された方向に目を向ける。そこには……。

驚きで目を見開いている女の子の姿。やっぱり純日本人だな。瞳の色も黒だ。

反射的に布団で自分の体を守ろうとしたのだろう。べつにそんなことしなくても、今すぐ警察署に連れて行ってやるのに。

俺は、どこかの煩惱主人公とは違って、美少女でも犯罪者なら警察に受け渡す。

さて、いつの間にか俺のケータイは黒から白に変色したようだが、気にせずに電話をかけようと二つ折りのケータイを開く。

「きや——っ!？」

待て待て待て！ なんてお前が悲鳴なんて上げようとしてんだよ！ これじゃあ俺が警察に疑われちまうよ！ 近所のおばさんが警察に電話するよ！

俺はあわててその女の子を押し倒すようにして左手で口をふさぐ。

おい、ちょ、暴れようとするな！

犯人を逮捕するかのように俺は相手を行動不能の状態にするべく、女の子の両手を頭の上でクロスさせ、右手で抑える。担任教師が言っていたが、俺は確かに変な意見を言わなければそこそ成績がいい高校生だ。だから、体育の授業でやった柔道ならある程度使いこなせる。

よし、これで一安心………じゃねえよ！ 俺何やってんの!？

これ本当に犯罪者になりかねない状況じゃん！ ああ！ その表情止める！

俺に行動不能状態にされた女の子は——相手が女子なのであんまり柔道の本格的な技は使わなくていいと判断した——涙目で俺のことを見ている。まるで俺がお前に襲い掛かっているみたいじゃねえか！……いや、今の構図をはたから見たら何にも言い訳できないんだけど。

とりあえず、今の状況はまずい。いったん冷静に。

『ごめん謝るから。とりあえず悲鳴を上げるのはやめてくれ。そしていったん話し合おう』

俺は小声で彼女に言う。やましいことは何もないはずなのに小声になつてしまふのが不思議で仕方ない。

女の子は二回うなずく。まずは彼女を解放してあげる。

『で、なんでお前は俺の部屋にいるんだ？』

と、俺は根本的なことを質問。ここで「お名前は何ですか？」なんてことは聞かない。

と、彼女は驚きの言葉を口にする。

『あ、あたしの部屋だからよ……！ は、早く出てって！ 痴漢！ 犯罪者！』

布団で体全体を隠して泣き出す女の子。えーと、どうすればいいの？ 出て行っても何もここは俺の家であることは間違いないんだし……。いや、今は俺が素直に出て行つた方がいいのか？

あゝ、布団に顔を押しつけてまで泣くのか。これは本格的に何かやばい気がする。俺は対人スキルはしょぼいが、ここでは四の五の言つてられないだろう。

「とりあえず、落ち着いて。なんだ？ 記憶障害なのか？」

俺の部屋を自分の部屋だと言い張るということは、何かしらの勘違いをしているか、目覚めた場所が自分の居場所——つまり自分の部屋だと思っているかだ。こういうのはどうやって治療すればいいのですか？

女の子は顔を俺の方に向けて大声で怒鳴る。

「記憶障害はあんたでしょ！ 他人の部屋に勝手に入って！ 自分の部屋だとか言つて！」

いやいや、それはあなたのことを言うのだと思います。っていうかまずは声の大きさを考えてください。近所迷惑だとか言わないから、せめて俺の人生が刑務所行き急行列車になつてしまふのだけは勘弁してほしい。

俺は四つん這いになつて一歩（？）彼女に近づく。

「とりあえず、冷静になつてくれ、じゃないと——」

「きやあ——ッ!？」

だから悲鳴あげるのだけはやめてくれ! 急行から快速特急になつちまうから!

俺はもう一度彼女の口を左手でふさぐ。別に左利きなわけじゃないぞ。

今度は押し倒すのではなく壁に押し付ける感じになった。

「頼むから! 話し合いをしよう! な!？」

まず話し合いを求めるなら俺がこういう風に力で抑えつけているのもやめるべきだと思ふのだが、いかんせんこの女の子はこうしないと俺を簡単に刑務所送りしてくれそうだ。

「お前は清水悠喜なのか? っていつか俺なのか?」

俺は彼女の口をふさいだまま聞く。もうそれしかないだろ!?

彼女は首を振る。ノーってことだよな。じゃあ関係ないじゃん。不法侵入したのはお前だ。

でも、ここで出て行つてくれって言つてもまたさっきの繰り返しだろうしな。仕方ない、この子が正気に戻るまで学校で時間をつぶそう。幸い七時五十分を迎えているので学校が閉まっているということはない。

俺は彼女の口から手を離して一個だけ約束させる「なんにもしないから、叫ぶのはやめてくれ」と、いう約束を。はあ、なんか疲れる。

俺はベットから降りて息を吐く。

と、窓の外をちらりと横目で見る。と、俺の家の前に俺のたった一人の友人と呼べる人物がいた。風美だ。

ちょうどいい。俺は今制服のままだし——なんでだ?——このまま風美と一緒に登校してしまおう。

俺は階段を下りて玄関のドアを開ける。

「風美、早いな。何時から待ってたんだ?」

と、ドアを開けるとともに風美に尋ねる。

「え、あ、十分くらい前から……」

そうか、まあそうだろうな。俺の馬鹿な夢みたいに一時間も前から待てるなんてことはないよな。

「まあいいや、風美学校いくぞ」

とにかく今はあの女のことは考えなくていい。むしろ考えたくない。あの記憶喪失野郎。

と、俺が玄関で靴に履き替えるために座り込む。でも、すでに靴を履いている俺。だからなんだ？

「……おい、玄関で何をやっている」

と、俺の後ろから男の人の声。この声はわかる。

「何って、靴はいてるだけだよ」

俺は振り返って確かめる。やっぱり父さんだ。朝はたまに会うことがあるが、今日は朝早くなかったみたいだな。

「違う、お前はなぜ他人の家で堂々と靴を履いているんだ」

「……何言ってるんだ、父さん？」

「……ふざけるのはよせ。俺はお前なんかしらん」

父さんははつきりと言いつつ放った。

……は？ 何言ってるんだよ。父さんも冗談を言うようになったのか？

「うちは四人家族だろ。何言ってるんだよ」

「君のうちは知らんが、確かに俺の家族は四人だ。お前など知らんがな」

何だよ、それ。どういうことだよ……！ 何言ってるのかわけわかんねえ！

「俺と七海と母さんと父さん！ 四人だろ！」

「知らん。俺の家族は俺、母さん、七海、それと夏希だ」

夏希？ 誰だよそれ。いったい何言ってるんだよ！

「風美！ もういい！ 行くぞ！」

俺は風美の手を取って歩き出す。

——自分でもわかった、思考回路が正常に作動していない。

風美は俺に無理やり歩かされるが「あ、あの……！」と抵抗してく

る。なんだよ、頼むから後でにしてくれ。

「あたし、人を待ってるんですけど……?」

知ってる、お前が昨日俺に言ったんだろ。待ってるって。

俺はその約束を覚えていた。だから、もう無理だった。

——そして、俺の思考回路が完璧に作動しなくなったのは、この言葉だった。

「えっと……あたしはあなたと初対面ですよね? 私、夏希を待ってるんですけど……」

この世界で 一

「……おい、何言っただよ風美……！」

俺とおまえが初対面？ そんなことあるはずねえだろ。学校で一緒に昼飯食ったり、買い物行ったり、ゲームやったり、いろいろやっただじゃねえか。なのになんで初対面だなんて言っただよ！

俺は叫びそうになるのを堪える。必死に、堪える。

……… そうだ！ まだ決まったわけじゃない！ 忘れてるなんてこと起きるはずがない！ これはドッキリかなんかなんだ！ すぐに母さんが誰かがやってきて「ドッキリでした」って言うに決まってる！

俺はさっきから何をこんなに動揺してるんだ？ これじゃあ……。

「あれ？ 風美おねえちゃん？」

と、玄関の方から声が聞こえた。この声は七海。

そうだ、七海ならちゃんと正直に、ふざけたりしないでほんとのことを言ってくれるはずだ！

「七海！ お前は俺のこと分かるよな！？」

やけに強い口調になってしまふ。それはなぜか……。知るかよ！ 七海、いいから答えてくれ！ 俺たちは兄妹だって！

けど、一度始まった絶望は、そう簡単には消し去れないものだった。「あつ、だ、誰ですか？ おねえちゃんの知り合いですか？」

何だよそれ！ わかるだろ！ なあ七海！ なんでそんな他人行儀なんだよ！！

誰なんだよ夏希って！！ 一体誰のことを言ってるんだよ！！「夏希って誰なんだよ！ さっきから何言っただよ！！」

俺はここにいる全員の顔を見回しながら叫ぶ！
近所から野次馬どもが集まってき始める。でもみんな遠巻きに見ているだけ。

そんなことはどうでもいいんだ！ そんなこと関係ない！

「夏希なんて存在しない！ お前らはいったい何を——」

「うるさいわねえ……………朝から近所迷惑じゃない？」

その声はほかならぬ俺の家の中から聞こえてきた。誰だよ。お前……………！

俺の通う学校の女子の制服姿で二階から降りてくる。なんで俺の家に俺と同年代の女子がいるんだよ！

さっき会ったはずの女子なのに、そんなこともわからない。だって、こんなに訳の分らないことが起きてるんだ、整理がつかないに決まってるんだろ！

俺はその女子を睨み付けるように見る。憎しみで殺すような視線で。

「……………夏希は存在する。お前はいつたい何を言ってるんだ……………！俺の認識の中に存在しないのはお前の方だ！」

父さんが、俺の正面から堂々と言い放つ。俺を睨みながら。

母さんがその女子が下りてきたのが分かったのか、キッチンから出てきた。

「夏希、お友達が待つてるんだから早くしなさいよ」

母さんは、その女子のことを夏希と呼んだ。夏希？ この女子が？ なんだよなんだよなんだよ！！ わけわかんねえ！ なんだこいつは俺の家にいて、こんなに受け入れられてんだよ！ なんて俺はみんなに忘れられてんだよ！

夏希と呼ばれた女子が母さんの方を向いて「分かってる」と一言返して、前——俺たちのいる玄関の方を向く。

「なっ！？ なんて変態がここにいるの！？」

出ていくって言うってたのに、っと思ったかと思うと母さんが口をばさむ。

「夏希ったら、素直になれないのはちよつとダメなところよね。今日は三人で行くんじゃないの？」

母さん、何言ってるのかわかんないよ。なんでその女子とそんなに親しそうに話してんだよ。そいつは赤の他人じゃなかよ！

母さんが俺の方を向いてはっ、っと口を手で押える。そして早歩きで玄関までくる。

「挨拶が遅れちゃいましたね。夏希の母です。えーと、お名前は？」
何だよ、名前なんてわかってるんだろ！ 頼むから正直に言ってくれよ！ もういい加減おかしくなりそうなんだよ！ まるで俺が間違ってるみたいじゃんか！

そこに父さんが追い打ちをかける。

「お前のことなど誰も知らない。初対面だ。いい加減変なことを言うのはよせ……！」

「そんな風にきつく言うのはダメじゃないの？ 初対面だからつきつくしすぎよ」

母さんまで、初対面だなんて言いだした。

そして風美がまた俺に言葉を放つ。

「もしかして……転入生？ それで道が分からなくて——」

「ッあああああ——！」

俺は背を向けて走り出した。

あんな、誰にも覚えられてないなんて……。今まではどうでもいいって思ってた。けど、実際誰にも自分の存在を覚えてもらえてないと、すぐくつらかった。

耐えられなかった。

俺は学校に向かって走ってる。なぜかわからないけど、そこに行けば誰かが覚えてくれると思った。変わり者だって言われてる俺なら、そう簡単に忘れられるはずはないと。

俺は校門を全速力で走り抜けて、靴を脱ぎすて、上履きを履かずに教室に向かう。

息を切らせながら教室に飛び込む。まだあまり人はいないが、クラスにいる全員の視線が俺に向けられてる。けど、違う。俺を知っているっていう目じゃない。

ひそひそ話してる声が聞こえる。「え？ 転校生？」「珍しいな」「委員長話しかけてやれよ」など、全く俺のことを知らないってい

う感じた。ただの一人も、俺のことを覚えてるっていうやつはいない。

くそっ！

俺は教室から出て、学校から去る。行く場所なんて、たぶんない。たった今この世界で俺の存外が認められる場所なんてどこにもない。昔通ってた中学校や小学校に卒業生の名前を調べに行っても、たぶん俺はいない。俺は、世界に捨てられたんだ。

なんで俺は世界に、嫌われてるんだよ！俺が何をした！？確かに人と違う意見ばかり言ってたかもしれない！けど！それだけでこんな仕打ち……！ふざけんなよ！

町の中を走る。ただひたすら。

走っていると見える周りの景色。同じなんだ、いつもと全く同じ。俺がいつも昼飯を買うコンビニも変わらずにある。学生が制服姿で歩いている。中には自転車に乗っているものもある。交差点も相変わらず車が行きかっている。いつもと同じ朝の風景なんだ。

何もかもがいつも見ようとしなくても見える、日常の風景。なのに、ただ一つだけ、違った。俺だ。俺はいつもその風景の一部になっていたはずなのに、今日は……たぶん今日からは、この景色の中には入れなくなる。

走っているのに、足にはではなく手に力が入る。なんでかなんてわかんない。忘れられてるのが嫌だったのかもしれない。特に……

風美に忘れられてるのが。

俺は近くにある小さな林がある公園に入る。ここでは子供会などでバーベキューが行われたりするが、普段は立ち入り禁止だ。でも、俺はそんなのお構いなしで、すぐそばにあるフェンスがない抜け穴部分から中に入る。

俺はその中でも思いつきり走る。その一直線上に木があるうとも止まらない。そのまま木に向かって蹴りをかます。走っている分勢いがついて、木が揺れる。足にも衝撃が伝わってきて、少し痛い。が、そんなの今の俺は感じられなかった。

足元に落ちていた木の枝を拾って木の幹に投げつける。イライラが止まらない。

少し離れたところに少し長めの木の棒があるのに気づく。ほうきくらいの長さだ。太さもそこそこ、簡単には折れないだろう。

俺はそれを拾い上げて、振り返りながら後ろにある木にたたきつける！

こんな行動、普段ではおかしいだけだと思っていた。ものに当たったりするのも、感情的になるのも、全部俺には無縁で、くだらないことだと思っていた。

でも、実際はそうでもなかった。たったこれだけのことで簡単に、壊れちまうものだったんだ。俺ってという人間は。

ショックだった。親との関係は挨拶くらいのもんだったし、対して思い入れもなかった。

七海だけは結構仲良しで、家族の中では最も仲が良かった。

けど、それよりも……。風美のことがショックだった。

同じことを何回も思うのはバカだと思う。一度終わったならそれっきりでいいとか、思ってたんだ。俺は。

けど、何回そのことを思い出しても、起こったことはしょうがないとか、そんなことは思えなかった。また風美と仲良くなればいいとか、都合のいいことは思えなかった。

なんで俺は風美に対してこんな気持ちを抱いているんだろう。これじゃあまるで、俺が風美のことを心から信頼してたみたいじゃないか。

……………いや、違う。それ以上だと思われても仕方ない。

俺が風美のことを好きなんだと思われても仕方ない。別にそんな感情はないなんて言っても、そうじゃないんだから。友達としても、恋愛対象としてかもわからないけど、好きだっていうのは本当なんだ。信頼してたっていうのも、一緒にいて楽しかったっていうのも、全部本当なんだ！ だからこんなに苦しくて、悲しくて……！忘れてほしくなかった！ 前兆なんて何もなかっただろ！？ な

のになんで！！

俺は何度も何度も木を切るようにして、木の棒を振りまくった。たった一人の友達だったんだ。たった一人の仲間だったんだ！中学の友達とも合わなくなっちゃった、だから今は風美だけなんだ！家族とは違う、他人から始まった関係で、たった一人だけ……！

俺はより一層力を込めて振り下ろした。それに耐えられなかった木の棒は真っ二つに折れる。

だらんと、腕を垂らす。気付くと両手が痛かった。そりやそうだと、あんなに思いつきりたたきつけてたんだ。それも木の棒が折れるまで。

俺の手から握っていた折れた木の棒の片方が地面に落ちる。手は、血は出ていないものの、真っ赤になっていた。

………涙が出てきた。こんなに感情的になったのは初めてだ。

こんなにいろんな感情を表に出したのも。泣くなんてしたのも、幼稚園以来じゃないだろうか？

感情を表に出さなかった俺が、こうなるんだ。こんなちよつとしたことで。

………風美………本当に、俺のこと………覚えてないのかよ………？

俺は涙を拭って木にもたれかかった。

この世界で 二

午前中は、林の中で眠ってしまっていた。疲れてしまったのだろうか？

でも、眠ったおかげである程度落ち着いてマシになった。

多分、この世界には『清水悠喜』っていう人間は存在しないんだろう。同姓同名の奴はいるかもしれないが、俺はこの世界には戸籍上存在してないってことだ。

俺は「はあ……」っとため息をつく。

「どうして、こんなわけの分かんねえことになっちまったんだろう……」

俺は林から移動して、いつものコンビニに来ていた。そこで漫画雑誌を立ち読みしながらつぶやいた。

さすがに俺も腹が減ったのでコンビニに来た。俺はいつも制服のポケットに財布を入れているので金はあったが、何せ金欠だったわけだ。三百円ちよつとしか入ってなかった。

これじゃあ飲み物一つとサンドウィッチ一つしか買えないので、時間をつぶしていた。

……よし、読み終わったからそろそろ買って店出よう。

そう決めたのでミックスサンドウィッチと、紙パックのミルクティーを買って外に出る。

「……………変態」

開口一番、俺のことをそう呼んだのは俺の部屋にいた女子。確か夏希とか呼ばれてたやつだ。俺がいたはずの場所に当然のように存在していた、美少女。

あの時はよく見えなかったが、やっぱり予想通り髪の毛は長かった。腰まで届きそうだった。アニメだとよく見るが、リアルだとあんまり……いや、全然ないだろう。

そしてこの女の子。前は瞳の色を気にしていたら気付かなかったが、

結構きつそうな目をしている。ザ・ツンデレという感じのネコ目だ。
「なんだよ……」

そう言って、自分より少し身長の高い夏希を見下ろす形になる。
でも、とりあえずコンビニの中でこんなことやるのはダメだろ。ほかのお客さんに迷惑だ。

俺は夏希の横を通り過ぎて自動ドアをくぐる。そういえば、俺は家に帰れないんだから、今日は野宿か。じゃあ、またあの自然公園、もとい林に行くかな。

……… ってか、これってあれなんじゃないか？ あの変な一件のせいで夏希とかいう女の子と仲良くなりましたー、的なさ。

俺の腕が誰かに掴まれた。ほらな、なんか予想したんだけど、すぐに起きるなんてな。何回か顔を合わせるうちに話すようになって、っていうのがベストだろ。

と、自分の意見を心の中で言いながら振り返ると、やっぱりそこには夏希という女の子がいた。

「なんか用？」

「……… ちょっと、話が訊きたいの。家に来てくれる？」

おっと、これは少々予想外だ。いきなり家に来てくれる？ なんて言うのはないと思っていた。だって朝あんなやり取りしたばかりなんだから、気まずいだろ。夏希とだけじゃなくて、本来なら俺の両親だったはずの二人とも、七海ともあんな風に……。

「……… なんで家に行かなきゃいけないんだ？ 話があるならここでもいいだろ？」

逃げた。俺は逃げた。いや、だって気まずいのは嫌だろ？ まあ母さんならそんなことはないと思うんだが、七海とも気まずいし、今あそこの家はこの夏希の家であって、俺の家じゃない。女の子の家なんだ。うん、そんなところに行く度胸はないです。

「ここで聞かれていいような話じゃないのっ」

夏希は真っ黒な瞳で俺を睨み付けながら言う。あゝ、この子気が強いタイプの子なのね。よく分かった。正直、こういう子は苦手

だ。こっちが何もしてないのに勝手に人のことを巻き込んでくんだからな。

俺と夏希はしばらく見つめあう——別にほえましい雰囲気じゃないが。

そしていつまで経ても夏希がしゃべらないので、俺はしぶしぶ「分かった」と言つてうなずいたのであったとき。

はあ、女の子の家に行く？　なんだよそれ、どこのゲームのイベントだよ。俺には無関係なんだからほっといてくれよ。あつ、でも、俺をちゃんとした居場所に帰してくれるんなら大歓迎ですけどね。ちゃんとみんなが……風美が俺のことを覚えてくれるなら、それでいいんだ。それだけでいいから。

だから俺は、夏希の家に行くことにしたのかもしれない。風美は俺のことを覚えていない。だったら、また他人の関係から始めればいいって。思ったから、今風美の一番近くにいるであろう夏希とかかわりを持つとした。

そう、普段の俺なら、こんなこと簡単に流していたはずなんだから。

俺は夏希の後をついて行って、よく見慣れた一軒家に来ていた。家に入るとき母さんが出てきたが、やはり朝のことを気にした様子もなくフツーに受け入れてくれた。

……やっぱり、俺の部屋とそっくりだ。間取りとかそういうのじゃない。置いてある家具もシンプルなものだし、多少女の子っぽくはなっているものの、やっぱり俺の部屋という感じが捨て去られてはいない。

俺はベットの端っこに腰を掛け、夏希はタイヤがついている椅子に座っていた。どちらも話をはじめない。ここは何か言うべきだろうか？　でもこいつが俺を連れてきたんだし、何か用があるわけだろう？　と、思ったがこのままでは話が始まらなさそうなので、俺が口を開いた。

「話ってなんなんだ？　朝のことか？」

「そう」

夏希は即答した。たぶん俺がこの言葉を言うのを待っていたんだろう。

「あんた朝言ってたわよね。お前は清水悠喜なのかって。あれはど
ういう意味？ 清水悠喜って誰？」

なんでこの女の子がそんなことを気にするんだ？ 俺は——自分で言うのもなんだが、初対面なのにベットに押し倒して拘束するとう常識からかけ離れたことをやったんだぞ？ 再開したならすぐさま警察に届け出てもおかしくないと思うんだが……。

「清水悠喜は俺だ。どういう意味っていうのは……なんでお前に対して清水悠喜かって聞いたのか、ってことか？ ん？ 文法あってるよな？」

「悪いけどもうちょつとわかりやすく言ってほしいんだけど。まあ、多分そんな感じ。なんであたしが清水悠喜なの？ っていうか、なんでその人とあたしを間違えたの？」

「んーと、間違えたっていうか……お前がこの部屋はあたしの部屋、っていうから、この部屋の主の名前を出しただけなんだが……」

俺がそう言つと、夏希は頭にはてなマークを浮かべて、ため息をついた。

「この部屋の主がなんであんななのよ。この部屋はあたしの部屋なの」

「ああ、知ってる。どうやらそうらしいな」

「じゃあもう一度聞くけど、なんでここが清水悠喜の部屋なわけ？」

今答えた通りなんだが、もう少し詳しく教えるということか？

えーと、だったら……。

「清水悠喜は生まれてからずっとこの家で暮らしてきて、その清水悠喜のために割り当てられたのがこの部屋なわけだ。……つまり、

つい最近、昨日まではここは俺の部屋だったわけだ」

俺はなるべく簡単に説明をする。まあ、俺にとっての簡単なんて逆にわけわかんないかもしれないが。

「わけわかんない」

ほらな、俺は少々言語機能が低下してるんですよ。フツの人間と比べて。学校の評価がおかしいだけです。

「あたしはずっとここで暮らしてきた。けど清水悠喜なんて言う人間は知らないし、あったこともない。何言ってるの？」

あつ、おそらく言葉の意味は理解していただけたんだと思う。わからないのは、自分の——夏希の今までのことから考えて、この部屋を自分の部屋だと言い張る俺の行動が分からないのだろう。いや、行動原理かな？

「だから、簡単に言うんだ。俺は昨日寝た、車にひかれる夢を見た、起きたらお前がいた、するとなぜか周りの人間は俺のことを知らないなんて言い出した。風美まで。だから俺は真実を言ってるだけだ。この部屋は俺の部屋……だったから、こういつてるんだ」

「……………つまり、本来はあたしがここにいるべき存在ではないはずなのに、それがどういいうわけかあんたがいないことになっている、ってことであってる？」

「まあ、そんな感じだ。まるで皆の、俺に関する記憶だけが抜き取られたみたいになってるんだ」

夏希は唇に人差し指を当ててしばらく考え込む。やっぱり美少女なんだよな。

「……ねえ、おかしいのはあんただっていうことはないの？」

「それはないはずだ。一応記憶はあるからな。……まあ、この記憶が間違つてたら俺が間違ってることになるのかもしれないけどな」

「……そう。どうやって考えればこんなことを説明できるの……？」

夏希は独り言を言ってから、また考え始める。

「あのさ、疑問なんだけど。なんで俺のことそんなに気にしてくれんの？」

「朝のあの態度。絶対におかしかった。あたしはあんたがどういう人間かなんて知らないけど、けどあの錯乱っぷりはおかしい。本当に信じられないことが起きて精神が耐えられなかったみたいだった。

だからそこまで錯乱してた理由を知りたいの」

ようは興味本位ですか。

俺は苦笑いして、言葉が続ける。

「でも、ここまで信用しなくてもいいだろ。俺が嘘ついてるかもしれないんだから。第一こんなファンタジックなこと信じられねえだろ？」

「確かに信じられないけど、それでも手がかりがこれしかないんだからしょうがないでしょ」

本当にこの女の子はいつたいなんなんだ？　なんか、ふと浮かんた言葉だが、なぜか俺が現状立たされている場所がわかる気がした。彼女は、俺と似て変わってる。

俺と似て……。まるで性転換したかのようにとは言わない。けど、その発想が出てきたおかげで、もう一つバカみたいな発想が生まれた。俺がもし、女として生まれてきた、または俺ではなく全く別な女の子がこの家に生まれたら。可能性はゼロじゃないはずだ。

いくつもの可能性で、未来は無限に生まれる。いろいろな世界が。

「パラレルワールド、か」

それなら、みんなの反応の説明がつく気がした。

この世界には清水悠喜なんて言う人間は生まれてこなかった。だから誰も清水悠喜のことを知らないし、覚えてるはずもない。そしてほかの可能性として、この女の子、夏希が生まれた。俺とは全く違う女の子。俺に似たところはあるとしても、全く別人。俺じゃない。

だが、もしここが俺の生まれなかった可能性の世界であっても、なぜ俺は今そこにいるんだろうか？　そんなこと起きるはずがない。違う可能性で分岐した未来——世界は二度と一つに戻ることはない。一度違うことが起きてるんだから、同じに戻ることはない。つまり俺はそんな分岐した世界に、来れるはずがない世界に来てしまっている。

じゃあ、俺はどうやってこの世界に来た？

もしかして、今日見た夢は夢じゃなくて現実だった？　それで俺は死に際に人間を超越した力を手に入れた？　自らをパラレルワールドに飛ばす力を？

……いやいや、それはないだろ。あれが現実であつたとしてもそんな能力に目覚めることはないだろ。

だとすると、どうして俺はここにいます？

……神様、どうして俺はここにいます？　……まさか本当に俺は神様に嫌われて違う世界に飛ばされたのか？　理不尽だな。つていうかこの思考はバカだ。中二的なあれが出てきてるな。いったん落ち着こう。

「パラレルワールド？　あの可能性の分だけ世界があるってやつ？」

ああ、俺は口に出していたのか。まあ、それならそれでいいや。どうせ相談できるのはこんなことに自ら首を突っ込んできたこの夏希くらいなんだから。

「そうだ。俺はその清水悠喜が生まれなかった世界に飛ばされたんじゃないかっていう考えだ」

「確かに、それならいろいろ納得がいく……けど。どうやってこの世界に来たのかってことよね」

夏希はすいぶん真剣に考えてくれる。

「なあ、お前ってこういう非日常なこと好きなのか？」

「……何言ってるの？　あたしは……ちょっと心配だったの。……その、急に現れたと思ったたら玄関で叫んでるし。そのあと走ってどつかいっちゃうし……。あんな不安定な状態の人、ほっとけないもんっ」

ああ、まことに失礼しました。あなたは俺に似てるなんてことはありませんでした。初対面の人を心配できるなんて素晴らしいと思います。その恥ずかしそうに言う姿も素晴らしいと思います。いじめたくなります。

という冗談は置いて。冗談は最後のところだけだ。とりあえず、

「なんか、ありがとな」

「？　なんでお礼なの？　そんなことよりもちゃんと考えた方がいいんじゃない？　自分のいた世界に帰りたいのはあんたなんだから」
そうだな。まずは考えなきゃ。

でも、俺の場合変なことしか浮かばないんだが……。

たとえば、風美か誰かが、清水悠喜はパレルワールドに跳べばいいのになー、とか思ったからこうなったのかとか。どこの女子高生の力だよってな。

ほかに俺はこの世界を守るために元いた世界から呼ばれたみたい。な。どこの勇者だよ。ってか誰に呼ばれたんだよ。

………　そういえば、ここに来た方法を考えてもしょうがないんじゃないか？　考えるべきなのは変える方法だ。来た方法が分かればそれと逆のことをすればいいんだろうけど、まずは変える方法という目線から考えるべきだ。

でも、変える方法か。そうだな………。

「夏希はなんか浮かんできたか？」

「へ、ふえ！？　な、夏希！？　な、なんであんたあたしの名前知ってんのよ！」

夏希はタイヤのついている椅子に座っていたので、それに座ったまま床を軽く蹴って、少し後ろに下がる。

「いや、朝いろいろ言い合ってるうちに………」

「そ、それに、いきなり名前で呼ぶなんて………！」

「あ、ごめん、嫌だったよな。っていうか、自己紹介すらしてないよな？」

「あ、あたしはあんたの名前知ってるからいいつ。だから苗字で呼んで！」

「分かったけど、苗字は何なの？」

「し、清水」

「ゴメン、やっぱり夏希って呼ばせてもらっわ」

「な、なんで！」

「いや、自分の苗字を呼ぶのはなんかなー、と」

っていうか過剰に反応しすぎだ。たかが名前くらいで。

っと、そういえば、まだ朝の時の謝罪がまだだったな。すっかり忘れてた。あんまり親身になって話を聞いてくれていたので忘れ去るところだった。

「えーと、そういえば朝のことなんだけど——」

「ッ！？ あ、あああ朝のこと！？」

と、急に夏希は顔を赤くしてうつむいて動かなくなってしまう。

大丈夫か？ っていうか、もしかして俺、ミスった？ 人間関係難しいな。

「あ、ああ……………あさ……………」

「大丈夫か、夏希？」

と、本当に何をしてんだろうな、と後々後悔することになるようなことをやった俺であった。しかも名前で呼び合うような関係どころか、今日初めて会ったばかりなのにな。

俺は夏希の方に近づいて、夏希の頬に手を当てて正面——俺の顔の方に向かせた。

「やつ！ あ、きゃ！」

と、なぜかより一層顔を赤くしてそっぽを向いてしまう。どうしたんだよ。

「あ、ああ、朝のは、錯乱してただけでしょ！？ わ、わかってるから大丈夫——！」

なんか、わかってるって言うてくれたし、大丈夫とも言ってくれたんだが………… お前が大丈夫じゃないだろ。

俺は、今度は自分の顔をそのまま夏希の顔の前に持っていくことにした。

「お前だいじょう——」

「ひゃっ！？ ……あっ！」

「あっ」

夏希がバランスを崩して倒れそうになる。こういうのって支える

べきなんだよな。でもさ、支えようとして、押し倒すなんて言う展開になつたらいやだよな。気まづくなるの分かりきってるじゃん。

だから俺は、支えるのではなく、夏希の手を引っ張って倒れる方向を変えた。

夏希は俺の方へと倒れてくるが、べつに問題ない。ここで体がもつれ合うなんて言うことにはならないし、キスしちゃうなんて言うことにもならない。そんなお決まりの展開はリアルでは早々起きるわけではない。

夏希はそのまま俺の胸に向かって倒れてきた。俺はそれを抱きしめるようにして支える。

「お前本当に大丈夫か？ 顔真つ赤だぞ。熱でもあるのか？」

ここで照れてるのかも？ なんて言う考えは浮かばない。だって出会ってすぐだぞ。好きでもない相手に照れるって、そんなことあるのか？ いや、ないだろ。少なくとも俺はそう思う。

「あつ、ああつ……！ だ、大丈夫だから、も、もう離していいよ……？」

そう言つて俺から逃れようとする夏希。えーと、なにこれ？ なんか、かわいい？

俺が抱きしめてるような状況なので、夏希はそのまま顔を上に上げて俺を見てくる。

見た目からしてもうちよつときつい性格かと思つてたら、なにこれ？ かわいいじゃん。

くっ！ なんか見てらんない！

俺は顔をそらして抵抗した。腕に余計力が入ってしまう。くそ、思つた以上に破壊力が！

自分のキャラが中学時代の状態に戻り始めているのにも気づかずに、同時に夏希を強く抱きしめてることに気付かずにそのことだけ考えてしまう。

「きゃっ……ちょ、ちよつと……な、なんで強く抱きしめるの……？」

不安そうな声で俺に聞いてくる。そして瞳にはうるうると涙がたまっていてうああうああうああああ！　ちよっとはこっちのセリフだああ！　これやばいって！　高校入ってからこんなことなかったのにいいいいいい！　しかもリアルでなんて始めたぞおおおおお！

これ小説だったらキャラ崩壊とか言われてるんだろうけどさ！
これは思った以上にやばいんだって！

俺は必死に自分と戦っていた。それで精一杯だった。

この世界で
三

あの後、俺は夏希を抱きしめていた手をほだし、しばらく顔を合
わせないまま沈黙が続いた。たぶん夏希も顔を合わせることなく
できなかっただろう。

とりあえず、少し落ち着いてきたから、話を戻して考えよう。

「それで、パラレルワールドのこと……. なんだけど…….」

うわっ、なんか緊張する！　こんなの始めてだぞ！

「う、うんっ。戻るのはどうすればいいのかってことだよな?」

夏希も気恥ずかしさを紛らわすためか、少し口調を強くしていた。もしかして、コンビ二の時に強い口調だったのは緊張してたから？

それか警戒してたから？ 俺が朝……………。そうかもしれないな。

たぶん、普段の夏希はさっきの赤面癖のあるいたってフツ―の女の子なんだろう。風美とは少しタイプが違うな。

……ん？　なんで俺は風美と夏希を比べてるんだ？　誰かと誰かを比べるなんて最低じゃないか？　うん、俺は最低だな。

とりあえず俺は軽く深呼吸をする。よし、落ち着いてきた。

「こういうのってさ、なんか理由があるわけだよな？理由もなしにこんなことが起きるはずもないし……………」

実際こんなことが起きたこと自体おかしいんだが、そこには目を瞑ろう。

でも、自分で言うておいてなんだが、理由なんてそうそうわかるものじゃない。人間だって、自分が何で存在してるのかなんて言う理由はわからないだろ。

「ってか、夏希は協力してくれるってことでもいいのか？」

「う、うん……。協力する。……夏希……ツ~~~~~！」

夏希は自分の名前を呟いてから顔を真っ赤にしてうつむいてしま
う。 あっ、またミスったのか。 名前で呼ぶのはダメってことなのか
？ おっ、俺にしては珍しくちゃんと理解できたみたいだ。

「えーと、なんて呼べばいいんだ？ 名前は嫌なのか？」

「な、なるべく、苗字で呼んでほしい……」

苗字か。俺も清水なんだが……仕方ないかな。協力してくれるって言ってるのに、嫌がるようなことをしたらダメだよな。なんで俺は協力者なんて作ろうとしてるんだろ。一人がいいって思ってたのに。

結局は、俺は弱いんだろうな。

「じゃ、清水は俺の話を全部信じてくれたってことでいいのか？」

そう、そこだ。俺がまず気になったのは。こんなバカみたいな、痛い中学生が言うようなこと、信じて言っただけで無理だ。

それなのに……

「信じてないなら、協力するなんて言わないよ」

初対面の変態犯罪者の言葉を、信じてくれてる。なんで、こんなに簡単に人を信じられるんだろ。俺なら笑い飛ばしてるはずだ。

「……でも、全部は無理。……えーと、なんて呼べばいい？」

「ん？ 俺のことをか？ 悠喜で構わないぞ」

「分かった。全部は信じられないけど、ゆ、悠喜が……その……困ってるってことはわかるし……。そんな人ほっとけないから……」

さっきも思ってたが、やっぱり性転換だなんて説はないな。俺はこんなきれいな人間じゃないし、優しくもない。俺なんかよりもずっと人間として素晴らしい。

「全部を信じるなんて、無理だつて。バカげた話なんだから。でも、それだけでも、信じてくれるっていうのは、ホントにうれしい。……」

「……っあ！」

俺なんか恥ずかしいこと言った！ 何今の台詞！ それだけでも信じてくれるっていうのはホントにうれしい？ なんか俺がほんとおかしくなってる！ こんなに他人に依存するような性格じゃなかったのに！ 昔も今も！

「ごめんね、結構あたしも驚いてるから」

「まあ、わかるよ。朝のなんてほとんど泣い……………ゴメン！　ちよつとミスった！」

「あ、だ、大丈夫！　もうあたしも変なこと言わないから！」

「いやいや、変なことなんて一度も言っていないと思います。むしろ正常な反応ばかりです。俺が異常なんです。だから焦って顔赤くするの止めてください！」

「いや、なんか俺、かわいいとか、感じたことないのに。この女の子だけは、かわいいと思えるんだよ。恋愛対象とかじゃなくて、何だろう、わかんねえや。」

「とりあえず、戻るための案を出していこう」

「う、うん。……………今のところ、あたしの考えだとここに来たってことはここで何かをやらなきゃいけないんだと思うんだけど……………」

「まあ、そうだろうな。でも何をやればいいのかなんてわかんないし……………。ベタなのだと人助けとか、ここでの出来事を楽しむとか、

あとはキスしたら戻れるとか……………」

「すみません、また俺はやらかしたみたいです。うん、これは俺でも原因はわかる一目瞭然だ。何いきなりキス発言してんだよ。バカじゃねえの！」

「そっというのがベタなんだ。あたしはあんまりわかんないな」

……………あれ？　なんか無事だ。え？　なんで？　キス発言したらまた気まづくなると思っただけが、なぜだ？　倒れてくるのを支えただけでこいつは真っ赤になるんだぞ。それなのになんでキス発言で無事なんだ？

分析分析。俺はなんて言った？　そしてどの部分が爆弾だった？

ベタなのだと人助けとか、ここでの出来事を楽しむとか、あとはキスしたら戻れるとか……………。っと言っただけだよな。まず、爆弾はキスしたら戻れるとか、っていう言葉だ。そのはずなのに夏希は——清水は別に平気みたいだ。考える、何でなのか。

……………あつ、わかった。あくまで例には出したけど、清水とすっって言ったわけじゃないから平気なんだ。清水は自分が絡まなき

や大丈夫なんだよ！ そうなんだ！ おお！ なんか俺この世界に来て結構他人のことが分かるようになってきたかも！？

……この程度で何を思ってるんだろう、っと俺は一瞬で冷静に戻るが、話は進む。

「……まあ、いろいろ考えても簡単には出てこないよな」

「そうだよな。……悠喜がもといいた世界でできなかったことをするとか？」

「それもあるかもな……。あとは、この世界で俺を呼んだ奴がどこかにいて、そいつを探し出すとかだな」

「ほかに、……もしかしたら、明日になったら戻れてるかもしれないっていうのもあるかもしれないよ？」

それもあるな。あっさりしてるけど、可能性はゼロじゃない。

「あとは、そうだな……。清水が出した、元いた世界ではできなかったことっていうのは、具体的にはどういうのだ？ 結構できなかったこと多いと思うんだが……」

「あたしも、その辺は悠喜が自分で考えなきゃ何とも言えないよ」

そりゃそうだよな。あっちには清水はいなかったんだから。……あ、清水っていうのは夏希のことだ。俺じゃないぞ。七海でもない。父さんでも母さんでもないぞ。なんかめんどくさいな。

それにしても……できなかったことか。部活もやってなかったし、バイトもやってない。友達だって風美しかいなかったから友達を作ることもしなかった。そう考えるといろいろあるよな。特に俺は。

ふと、風美に言われたことが頭に浮かんだ。

「……恋……とか……」

恋とかしたいと思わないの？ と風美に聞かれた。俺はいや、と答えた。別に俺は恋をしたいとは思っていないが、逆に思っていないからこそやれということもあるんじゃないだろうか？ もうこの世界は何でもアリだ。こんな世界に人を飛ばすなんてことをしたんだ、可能性はいくらでも出てくる。……ってことは、パラレルワールドがいっぱいできてるんじゃないか？

「恋……………かあ……………」

清水がつぶやく。なんだ？ 清水は恋してるのか？ なんてことは聞かない。それは俺には関係のないことだから。別に俺のことを好きだとか言うなら関係あるが、それはないだろう。何度もいうが、俺たちはあつて間もないんだ、こんな話をしてることにすら驚いてる。だから、一目惚れでもない限りそんなことはない。そして俺は容姿はフツー以下だ。よって一目惚れの可能性はない。

「まあ清水は、かわいいからいいけどな……………」

と、俺はつぶやいた。

清水なら一目惚れでもしてしまいそうな容姿だからな。うん。

「え？ か、かわいい！？ う、うううう！」

また清水は顔を赤くしてしまう。えーと、今度のはわかりません。キスとか押し倒すとか、その辺のことは言っていないはずだ。だから平気なはずなんだ。俺は素直に思ったことを口にしただけなんだ。

「……………あたしならいいって……………そんなこと言われても……………ツ」

そこで頬を赤らめられてもツ、という感じなんだが……………。なんだ？

俺は何か変なことをいったか？ っていうか、なんかミスったか

？ 反復反復。

何をすれば元の世界の戻れるかという話だった。俺がやれなかったこと、やりたかったことは何かという話をして、恋の話題になった。そして俺はこういった。

——まあ清水は、かわいいからいいけどな……………

……………あれ？ なんてだろう、ミスった気がしない。

なのに清水はこんなにゆでだこみたいな状態になってる。……………

さて、どうしてでしょう？ お答えくださいって感じた。いや、マジでわからないんで勘弁してください。神様ならわかるでしょ？

答えてくださいよ。

なんていつものように現実逃避はしないで真剣に考えてみよう。

恋の話題が来たという時点で俺は経験が——全くないというわけは無いがほぼゼロに等しい。風美と話したのが初めてで、それだけ

だ。

風美とはもうそんな話はできないんだろうけど。……ってか、俺は風美とそういう恋の話をしたかったのか？

俺って、結局どうだったんだろうな。風美のことをどう思ってたのかなんて、全然分かんなかった。くそっ、なんで俺はこんなことで何回も悩んでんだよ。よし、いったん変なことを考えるのはやめだ。ちゃんと話に戻ろう。

「あたし……そんなにかわいくないし……胸だって小さいし……」

……」

あつれ、何でこんなことになってるのかなあ？　なんかマジで恥ずかしそうだし。……俺が一体何をしたっていうんだよ！　頼むから変な反応はやめてくれ！

「それに……まだお互いのことよく知らないし……」

「清水、今更だが俺の言った言葉のどこにそんな要素があったんだ？」

俺は冷静に聞き返すが、っていうかわかってると思うが、人はこういうことが起きたとき、動揺しすぎると冷静に対応してしまうのだ。まだ思考が働いていてなおかつ理性を保っていれば。例を挙げるならば、朝の俺だな。あれは理性が吹っ飛んでたからああなったんだ。「だって、か、かわいいから……あ、あたしとなら……っ、ちゅきあてもいいって」

「……えーと、ごめん、最後のところなんて言ったかも一回聞かせてくれ」

ちゅきあてもいい？　なんだよそれ。俺は今まで聞いたこともないぞ。

俺が訊き返すと清水はより一層顔を——もう頬では表現できなかったので——赤くして消えそうな声でもう一度（？）さっきの言葉を言った。

「ゆ、悠喜は……あたしとなら……付き合ってもいい……って」
「……」

えーと、どこをどう解釈したらそうなるんだ？　そう解釈するなら「まあ清水なら、かわいいからいいけどな……」とかだろうが。俺が言ったのは違うはずだ。……あれ？　違ったよな？

小説なんかじゃないリアルな人生なので、自分の言葉を読み返したりすることはできない。不便だなんて、初めて思ったぞ。

「とりあえず、その言葉に関しては触れないでくれ。特に深い意味はない」

どういうことを考えてあんな言葉が出たのかというのは、いつもの俺なら訊いているであろうが、こいつの性格から考えるとたぶんやっちゃいけないだろう。俺は学習した。

……すみません、嘘つきました。恥ずかしいだけです。俺が逃げただけなんです。

「とにかく！　話がずれたから一回戻すぞ！」

俺は強い口調でそう言って、若干強引に話を戻す。

「俺がこの世界に来たのがもしそんな未練みたいなものだとしたら、俺にはここに来るようなことはない。未練が何一つないからな」

この発言だけ聞くとリア充みたいに聞こえるだろうが、そんなことは断じてない。関心がなかっただけだ。

「そ……それだと……。何かの拍子に世界を飛んだとしか……」
まだ若干話を引きずっていそうな話し方である。深い意味はないって言ったんだからそのまま聞き流せばいいのに。

フツーにかわいいと思っただけなんだし。

「その何かの拍子についてだが、一つ心当たりがあるんだが……。それでも理由が分からないんだ」

「心当たりって、なに？」

「俺はこの世界に来る前にトラックに跳ねられそうになったんだ。つてか跳ねられる直前で目が覚めた」

「目が覚めた？　夢だったってこと？」

「まあ、そういうことだな。それで俺のベットで……お前のベットの中にいたわけだ」

「そつ……そうなんだっ……」

俺は自分のベット、と言いかけて言い直した。今はこいつのベットなわけだからな。けど、それはいけなかったらしい。なんかまた頬赤らめてるし……。人間関係は難しい。つくづくそう思う。

……あれ？ そうなんだ、とだけ言って終わりか？ これは俺がしゃべる番なのか？

「……まあ、とにかくさ。心当たりはあっても理由とかがさっぱりわからないわけだ」

「う、うん……」

えーと、やっぱり俺はこういう人と接するのは向いていないのだろうか？ なんか清水の顔赤いままだし、俺のせいで知恵熱とか出したのか？ なんか罪悪感。

今日は晴れてるし、外はまだ二時を過ぎたころだから明るいの、俺の心は見事に曇天だった。っていうか、今曇天になった。

「……結構難しい問題だね。簡単には解けないと思うし……。時間かかりそうだよ」

「そうだろうな。はあ……一日どころか一ヶ月で解決するかすらわかんねえ」

それ以上にかかるかもしれないしな。ほんと、なんか俺が悪いことしたのか？

これじゃ、ここに来るたびに——清水と会うためにだ——こんな風に気まづくなったりするのだろうか。特に清水家の両親と。

じゃあ、これから話すことは決まったな。

「いきなり話変えるけどさ、清水……」

俺と一緒に暮らしてくれないか？

「……ひゅ……ひゅえ！？」

何とも文字にしにくい言葉が出てきたもんだ。そしてやはりこんな反応ばかりされる。いやだからマジで理由が分かんないんですっ

て。

「いやさ、俺はこの世界に来たわけだろ？　俺が存在しない世界にいるんだよ。だから俺はこの後野宿しなきゃいけないんだが……。てか、本当に協力してくれんの？」

「そ、それはもちろんするけど……いきなり一緒に暮らすなんて……」

とりあえず整理。一回一回こうやって整理するのは面倒だが、こうしないと前に進めない。なんでこんなに顔が赤いんだ？

清水は一緒に暮らすという言葉に過剰反応している。……一緒に暮らす？　まてまて！　よく考えたらそれって結構ヤバめのことなんじゃないか？　考え方を変えればプロポーズにも取れるんじゃないか！？　やばいやばいつ。説明しなきゃ！　いやしたんだけどね！　「だからつまり俺は、帰る家とかがないから居場所を提供してもらおうと……。それに一回一回お前に会うために友達とかとしてこの家に来るのは気まずいというか……」

「あ、あつ、そういうこと！　う、うん……でも……」

「朝みたいなのは絶対しないからそこは心配するな！」

強い口調になってしまふのは仕方がない。

「う、うんっ！　信用してるけど……」

清水の声がどんどん小さくなっていく。

そして清水は少し強い口調で――声が小さくなってたからそういう風に聞こえたのかもしれないが――こう言った。

「ごめん！　やっぱり、一緒に暮らすのは……」

「……そうか」

確かにそうだよな。いきなり初対面のやつと生活を共にする――ちよつと言いが引つ掛かったが気にしない――ことになったら、頼まれたら了承はできないだろう。

「いきなり変なこと言ってごめん」

俺はそう一言言ってほかの話はまた明日ということになって清水家を後にした。何回見ても俺の家にはしか見えない。

まあ、これで俺は野宿することになったんだが、どうしようかな。ここでもかに頼れる人なんて風美くらい……今は無理だよな。風美との関係はもうないんだから。

自分でそう結論付けておいてこんなにも落ち込む。バカだな。

……………林に行くしかないよな。俺は沈みそうになった気持ちを紛らわせるために動き出した。

やっぱり違う。清水夏希に対してのかわいいっていう感情と、風美に対しての一緒にいたいっていうのは、全然タイプが違う。風美に対しての思いの方が、よっぽど強くて。また、風美と仲良くなつて、前みたいに一緒に昼飯食って放課後遊びに行つて、できなかったけど、朝は一緒に登校したい。

かわいい!!好きっていうことじゃない。やっぱり一緒にいたいっていうのは特別なことなんだ。

俺がこんなことを思うのはバカみたいなんだけど、それでもわかった。俺は……

風美のことが好きだ。

風美以外の女子と話をして、触れあって、初めて分かった。風美は、俺の中でとくに特別な存在になってたんだ。

この世界で 三（後書き）

よかったら感想お願いします

この世界で 四

翌日。俺は林で目覚めた。野宿なんて初めての体験だったけど、べつに不便だとかは思わなかった。……いや、テレビがないのはちょっと不便だった。

でも、案外ぐっすり眠れたのは驚いた。俺はどこでも生きていけるんじゃないか？ と思ってしまう。誇大妄想ですね。

この生活も長くなるんだろうな。

今は午前九時。もう清水は学校に行っただろう。つまり俺は今やることがないわけだが……さて、どうしたもんかな。

手がかりを探す。くらいだろうな、やることは。

手がかりと言っても、パラレルワールドから戻るための手がかりなんて、非日常すぎて見つからないだろうけどな。

俺はそう思っていてても歩き出した。だって、風美と一からやり直すチャンスくらいは見つかるかもしれないだろ？

だから俺は住宅街に来た。風美の家がどこにあるかなんて知らないけど、林にいるよりはずっといいはずだ。夕方になれば学校から出てくるだろうし。

……つてか、よく考えたら、朝早起きして清水家の前にいれば風美と会えたんじゃないのか？ たぶん清水夏希と一緒に登校するために家に寄っていくんだろうから……あゝ、バカなことしたな。いきなりやる気なくなった。

歩いていた足を止めてため息をつく。

チャリがあればもうちょっと楽に移動したり、手がかり探したりできるんだろうな。

俺の今の装備品は制服、金、以上だ。生徒手帳も制服ではなく鞆の中に入れてるので今は持っていない。ケータイもそうだ。この世界に来たとき、来てしまったときはベットに置いてあったんだから持ってない。飯に持ってたとしてもつながるかどうかわからない

しな。

それにだ、金はもうほとんどない、百円すらない。普段から財布とかを持ち歩く習慣をつけておけば少しはマシだったんだろうな。

俺はもう一度ため息をついて歩き出す。

俺は昔から行動範囲は狭かったので、少し遠くに行くとき迷う危険性がある。まったく、小学生かよ俺。まあ事実だからしょうがない。俺の家のこの近く——清水家の近くにはこれといった建物は存在しない。本当に住宅街だ。少し歩けば俺がいつも行っているコンビニや、小さな公園くらいはあるが、ショッピングができるようなところはない。本屋もないとか、ホント何度嘆いたことか。一駅分移動しなきゃないんだよな。立ち読みはコンビニでしかできなかったな。

って俺はなんで、あのころは楽しかったな。みたいな大人が感傷に浸るような状況になってるんだ？ いや、もちろんパラレルワールドに飛ばされたからなんだけどね。

どうしたもんかね。やることが見つからない。腹減ってるけど金がないし、立ち読みをする気にもなれないし。こんなことなら林で思考を巡らせてた方がよかったかな？

「あら？ 君は確か……」

聞きなれた声が真後ろから聞こえたので俺は振り返る。その人も俺を見ていた。さっきの言葉も俺に向けられたものだったんだろう。俺の母さん、清水夏希と清水七海の母さんだ。

「あつ……………。お、おはようございます」

俺は、今この人とは家族という関係でないことを思い出して丁寧に挨拶をする。

「おはようございます。それより、学校はいいの？ もう授業が始まってるんじゃない？」

「あ、それは……………」

俺は口ごもる。

母さんは清水夏希みたいに俺の言葉をうのみにしてくれるとは思え

ない。夏希はあんな性格だから協力してくれることになったけど、母さんは夏希と違って大人だ。常識も夏希よりある。高校生なら興味本位でいろいろできるかもしれないが、大人はそうはいかないだろう。

俺が何と説明すべきかと思案していると、母さんが優しい笑顔を浮かべて言った。

「何か事情があるなら無理に話さなくてもいいのよ。ただ、夏希にはいろいろ話してあげてね。あの子少し……苦手だから」

「？ 苦手？ 何がですか？」

俺が訊くと、母さんはどこかに座って話さないかと言ってきた。

俺は母さんに従って、清水家まで歩いて行った。

今は誰もいないから、気まづくなるようなことはないはずだ。だから、もう一度見に行こう。俺がいた場所を。

前向きになってきているなんて、思わなかった。目標があれば行動できるから。それがフツーだと思っているから。だから、少しでもこっちの清水家のことを知っておきたかった。それが一番のヒントになることを信じて。

「どうぞ」

母さんはそう言って俺の前にお茶を出した。そしてテーブルを挟んで向かい側の席に座る。こんなことだけでも俺の居場所じゃないんだと思ってしまう。

母さんは湯呑に注いだお茶——麦茶だが——を一口飲んでしゃべりだした。

「さっき、何が苦手かって聞いたわよね、夏希が」

「はい」

俺も少し他人行儀になってしまふ。でもそうしなければいけないだろう。

「夏希はね。人と付き合うのが少し……苦手なの」
「え？」

人と付き合うのが苦手？ そんなことないだろ。初対面の俺とあんなに親しく話してたんだから。

「あの子にとって友達は風美ちゃんだけなの。昔から人見知りだったから、自分から話しかけることとかが苦手なの」

「でも俺とは親しく話してくれましたよ。初対面なのに」

俺が訊くと、母さんはもう一度麦茶を飲んでから説明してくれる。「今はそうなの。初対面の人にはある程度慣れたんだけど、今度は友達として仲良くなり始めると、なんでかあの子、少しきつくなっちゃうのよ」

変わってるでしょ？ と母さんは苦笑いをしながら俺に言う。

あいつも——夏希も、俺と同じで人付き合いが苦手だった。俺とは違うタイプだけど、結果は一緒。人とうまく付き合えない。

そして、風美だけが友達だっていうのも一緒。俺も夏希も、風美とは親しく、本当の自分で接することができたんだと思う。俺はそうだった。

「あなたは、まだ夏希と出会って日が浅いの？」

「はい」

「そう……。じゃあ、夏希と仲よくしてあげてね。あの子も多分、好きであんな態度をとってるわけじゃないから」

仲良くなった人にきつく当たってしまう？ 照れ隠しなんじゃないのか、それは。ツンデレじゃないのか？

「……しみ——夏希は、どういう人にそんな風にあたってたんですか？」

「どういう人って？」

「たとえば、ものすごく仲がいい男子だとか、かつこいい奴だとか……」

「うーん、そうね。そんなことはなかったわね。確かに男の子にもきつく当たってたけど、女の子の方が多いのよね。あんまり特定の人っていうわけじゃないと思うの」

そうか。でも、なんで仲良くなれた友達に、そんな風にきつく当

たるんだろ。俺が言うのもあれだけど、夏希はちょっと……
変わってる。

俺とは違うけど、変わってる。

俺と似てるけど、違う。おもしろい矛盾点だな。俺が勝手に似てる
って思ってるだけなんだけどな。ほんととは全然違うだろう。

「でもね、風美ちゃんだけは、夏希のそんな態度にも、ちゃんと接
してくれたの」

風美は、そういうやつだ。だって俺にも何度も話しかけてきたん
だから。誰も俺に寄って来なかったのに、風美だけは……。

そう思うと、風美も同じだ。変わってる。

「俺は、夏希には感謝しなきゃいけないんです。だから夏希と会わ
なくなったりはしないと思います」

俺が、この世界から無事に向こうの世界に帰るまでは。夏希に協
力してもらう以上、こっちが変なことをするわけにはいかない。そ
れが、せめてもの礼儀だと思う。

「そう。ありがとう」

「お礼を言うのはこっちです。ありがとうございます。夏希のこと
聞かせてくれて」

可能性としてはここはパラレルワールドってことで間違いないって
ことはわかった。そんで、夏希は俺の性転換バージョンかもしれない
ってことが再び浮上した。何の解決にもなっていないけど。少しで
もいろんなことが分かればそれでいい、今は。

「あと……ものすごく失礼だとわかっているんですけど……。この
家を、見せてもらえませんか？」

「？ 別にいいけど……。どうして？」

「……すみません。それは、答えられないんです」

「……そう。……七海と夏希の部屋以外なら、私が許可するわ」
「ありがとうございます」

俺はそういうとすぐに席を立った。なるべく早く済ませた方がい
いだろう。失礼だったことはわかってるんだから。失礼だってわか

つてても、こうするしかないんだ。二つの世界で違うところ、同じところをもっと理解しないと、見つけないといけないから。

まずは今いるここ、リビング。周りを見回しても、俺の知ってる清水家とならわかりはない。しいて言うなら、昔の家族みんな撮った写真。俺がいた場所に、俺の代わりに夏希が写っていることくらい。

七海と夏希の部屋はダメだってことだから、二階には上がれない。それに母さんの部屋なんて俺は見たことないから見ても意味がない。俺はとりあえず一階を歩き回りながら見て、玄関で母さんに挨拶してから外に出た。

どうするかな。まだ十一時だ。夏希が帰ってくるまでまだ結構ある。

俺はこういう時何をしていたか。決まってる答えは一つだ。

「林に戻って寝よ」

この世界で 五

俺は夏希が帰ってくる時間——夕方に、もう一度夏希の家に行った。また清水家に行くのは、やっぱり気まずさがあつたが、それでも俺はたった一人の協力者に会うために行った。

でも、インターホンを押せない。緊張しているんだ。

夏希は、仲良くなれる相手とは、仲良くなれそうな相手に対してはきつくなってしまう。じゃあ、俺に対してもそうなる時が来るのか？　っていうか、なんでそんなことをするんだ、夏希は。わからない。

「悠喜、こんなところで何してんの？」

と、俺が変なことで頭を使っていると、後ろから協力者の声が聞こえた。

「まだ帰ってきてなかったのか。って、見りやわかるよな」

俺は体を夏希の方に向けて夏希の目を見る。

「お前のことを訪ねに来たんだ。で、早速だけど、また頭かしてもらいたいんだが……」

「戻る方法を考えろってことでいいの？　それなら協力するって言うたじゃない」

信用してなかったの？　と少し不機嫌そうなお様子。でも、きつい態度になるっていうのとは違う。

俺は一つ息を吐いてから、ここで話をするのかどうか聞いた。

「あたしの部屋に来た方がいいんじゃない？　七海と会ったら気まづくなると思うし」

それもそうだな。あいつは学生だから、もしかしたらすぐに帰ってくるかもしれない。玄関で鉢合わせするよりは、夏希の友達として部屋にいた方がいいだろう。

「なつ……清水がいいなら、上がらせてもらおうよ」

俺は夏希と言いかけて止めた。意識すれば簡単に呼び方なんて変え

られるから問題ないのだが、やっぱり自分の苗字を自分で呼ぶのは抵抗がある。だが、こいつからの頼みなので仕方がない。

俺は玄関で靴を脱いで階段を上り、夏希の部屋に入る。

ガチャ、つと夏希が部屋のドアを開ける。シンプルな部屋。そこはやはり俺の部屋と同じに見えた。

夏希は部屋に入ってタイヤのついた椅子に腰かけ、俺にベットに座るように促す。

昨日と同じだな。

「……あたしも学校で少し考えてみたんだけど……情報が足りないから、あんまりわからなかったんだけど、あたしと悠喜が同一人物かどうか、そこが重要になる気がするの」

「……どうということだ？」

反応が遅れたのは言葉の意味が分からなかったわけじゃない。ただ単に届かなかっただけだ。脳に。いきなり夏希の方からこうやって切り出してきたんだ、まずは話を聞くよりも「ああ、本当に協力してくれるんだな」っていうことが浮かぶだろう。

「つまり、あたしと悠喜が同一人物なら、性別だけ変わった一人の人間だしたら。あたしたち二人がそれぞれ何かをすればいいんだと思うのよ。……けど、もし仮に、全く違う関係性のない人だしたら、あたしはあくまで他人。あんたが元の世界に戻るための力ギにはならないと思うの」

「つまり、同一人物なら二人で頑張ればよくて、他人ならもう一人力ギになる人間を探さなきゃいけないってことか」

夏希の考えはすこしずれてるような気もするのだが、まあ、考えとしては全外的外れではないだろう。

でも、関係性がないってというのはあくまで向こうの世界での話で、こつちの世界では俺の立ち位置にいる夏希は重要人物だと思うんだがな。

「そついうこと。それで、悠喜が向こうの世界にいたときの友達とか、関係が深かった人とかはいないの？」

「いるにはいるけど……家族以外で一人……」

「だれ？」

「……風美だよ」

風美……。確かに風美ならカギにふさわしい人間かもな。俺とも夏希とも関係が深いたった一人の……。夏希にとっては友達で、俺にとっては大切な人だから。

「風美？ 知り合いだったの？」

「ああ。たった一人のな」

「……そう」

夏希は何を思ったのか、少し声のトーンを落として静かに返事をした。夏希も同じような立場だから、同情でもしているんだろうか？
「で、ちょうどいいから風美のことなんだが……。俺はもう一回風美と付き合いたい」

「……………え！？ 付き合いたいって……………それにまたって……………彼女だったの！？」

「違う違う！ そういう意味じゃない！ 友達としてとか、大切な人としてだよ」

大切な人としてって、結構大胆なことを言ってる気がしなくもなくもないのだが、事実だからしょうがない。

「だから、俺としても風美は何かありそうな気もするんだ。俺とおまえが仲いい友達だからな、風美は」

共通点。それをしらみつぶしに当たっていくのが無難かもしれない、という言い訳を自分にして俺は提案した。本当はただ風美と話して、前みたいに……………何回も同じことばかり考えてないでさっさと前に進もう。

「それに、俺の知ってる風美なら、すんなり受け入れてくれると思うんだ」

「悠喜の知ってる風美っていうのは、あっちの世界の風美っていうこと？ その風美と性格とかが同じならってことでいいの？」

「清水は理解が速くて助かるな。そういうことだ」

「そう。だったら今風美を呼ぼうか？　そうすればきっかけくらいは作れるし……」

「いや、今はさすがに……でも、俺は学校にも行ってないから会う機会がないんだよな」

なら今の方がいい気もするんだが……。

「……やっぱりいきなり呼んでも、なんか……」

なんで俺はこんなにしりごみしてるんだ？　俺こんな奴だったのか？　チキン野郎だったんだな、俺って。まあ、自分から誰かとの関係を築こうなんて今まで一度も思わなかったから、どうしたらいいのかわかんないんだよな。

そんな俺に、夏希はアドバイスをくれる。

「でも、友情に時間は関係ないとかいうけど、友達になるのに早いに越したことはないと思うよ？」

「……そういうもんなのか？」

「多分ね。今じゃなくてまた今度、っていう風にやっているとどんどん後回しにしちゃって、もう自分から動けなくなるかも知れないからね」

「ずいぶんと詳しいな……」

母さんが話してみたいに、人との交流が苦手だとはとても思えない。

「これは別に実体験じゃないよ。風美が言ってたの」

風美が？　あいつこんなこと言うのか。確かに想像できなくはないが……少し意外だ。いつもアニメとかの他愛もない話ばかりだからな。

「それで、どうするの？　今呼んでみる？」

………どうしよ。

いや、確かにまたすぐに風美と話せるようになるなら早いに越したことはないと思うんだけど、どうも緊張するというか……後ずさるというか……。

………今「このチキン野郎が！」って殴られる絵が浮かんだん

だが……やばいな、実際にありそうだ。

……ああもう！ 悩んでても仕方ないだろ！？ だったら早く前に進めよ！

「……………風美がオツケーなら、呼んでくれ」

まったくもって、人の——俺の心は不安定だな。感情を一定になんて誰もできないだろうが、ここまで上下運動とかが激しいとさすがに俺自身も驚く。

「分かったよ。悠喜のことはある程度話しちゃっていい？」

「それはお前に任せる」

風美はいきなり「パラレルワールドから来た男の子が家にいるんだけど、その男の子が風美に会いたいつて言ってるの」と聞かれたらどうするだろう。考えるまでもない。俺の知っている風美なら、無論……。

『その子に会ってみたい！ 今から行く！』

という感じになるんだろうな。

でも、風美がもしそういう性格でなかった場合、冗談でも言っているのかと思ったり、笑ったりするだけだろう。

「もしもし風美——」

清水もそれくらいはわかっていいのか、電話に向かってしゃべっている声を聞いても、俺の今の状態に関して触れてるような言葉は聞こえなかった。

男の俺からすると少し長めの会話を終わらせて、清水は俺に報告する。

「今暇だから来るって。悠喜のことも話したけど、そんなに気にした様子はなかったかな？」

あ、そうですね。なんか気にした様子がないって、少し傷つきますよ？

まあ、そんなことはどうでもいい。今俺の頭の中では風美と初めて話した時のことを何とか思い出そうと、脳細胞の一つ一つを念入りに調べていた。そんなに昔のことじゃないはずなのに思い出せない

いんだよ！ 確かに昔は全くと言っていいほどの無関心だったけど、記憶にくらい保存されてるだろう！？

とりあえず、風美が初めて俺に話しかけてきたときの俺の対応は思い出したけど、俺の初めての言葉が思い出せない。

話しかけられた時の対応は、全く意味がないから却下だ。だってまずはじめに風美にやったことは無視だったからな。

それでしつこく何回も話しかけられて……。何回か相づちはうった気がするけど、それじゃ意味がない。もう少しちゃんと思ひ出さなくては……！

最初の言葉最初の言葉……………。

俺は風美が家にやってくるまで永遠と脳みそをフル回転（？）させていた。

この時清水が俺に何か話しかけたりしていたのなら、俺はその話を全く聞いていなかったんだろう。話しかけられたなかったことを祈るばかりだ。

……………思い出せそうだぞ！ えーと……………。

この世界で 六

「ご結婚、おめでとうございまーす！」

風美が部屋に入ってきたときの第一声がそれだった。

清水がドアを開ける、風美が入ってくる、俺と清水を交互に見て、このセリフというわけだ。風美の脳内で何がどう事故したのか知らないが、まずは否定の言葉。

「すまないがそういうわけでは無いんだ」

「いや、夏希はこんなに顔真っ赤にしてるから」

俺が清水の方に顔を向ける。

見事に赤面していた。どうしたんだ清水、それじゃあまるで図星みたいじゃないか。もう少し適応する能力をつけろよ。

「とりあえずそういうことはない。だから話を——」

「一緒に暮らすんでしょ？　じゃああたしが邪魔しちや悪いじゃん、おいとまさせていただきまーす」

じゃね、と言つて風美はドアを閉めて出て行った。

.....
いやいやいやいや！　なんで帰ったんだあいつ！　なんでいきなり帰ったんだ！？　なんで呼んだと思つてんだよあいつう！？　世界が変わつてなんかめんどくさい性格になつてねえか！？

「ちよつと待てて！」

俺は立ち上がつてドアを開ける。あのやろうなんて言う誤解をしたまま立ち去りやがったんだ！　あれは風美であつてるのか！？

見た目は風美そっくり。女子の見た目なんて気にしたことなかったけど、風美は長いこと.....そこまで長くはないけど友達をやつてきた仲だ。間違えないはずだ。実際ちゃんと見たことはないが.....

黒髪セミロング、大きな黒い瞳、本当に楽しそうなあの笑顔。全部同じなんだ。

.....同じなんだよ。全部。

「清水！ 行くぞ！」

もう変な誤解がどうかじゃないんだよ、そんなの追いかける口実がほしいだけ。本当は、また、あの無邪気な笑顔を、俺に向けてほしいんだ！

俺は清水を置いて走り出す。階段を下りて玄関へ。

「あわててどうしたの？ お探し物ですか？」

と、階段を降りたところで発見、確保！

「ちよっ！ い、いきなり、抱き着かないでよ……」

……うん、この反応、風美だな。そして俺も自分の行動をもう少し制限しよう。マジで。考えてから行動しよう、本気で。

「ごめんっ、俺こういうのうまくできないから……」

こういうのとは果たしてどういうのだろっ。相手がどんな解釈をするのかを考えるまでに至らないのが俺という人物だ。

「ま、まあいいよ。それで……夏希は？」

風美は階段を見上げながら訊く。俺はため息をついて、招き猫のように階段をのぼりながら風美に来るように伝える。

清水の部屋、ドアのすぐ横に清水は座っていた。俗に言われる女の子座りで。そして当然のごとく、赤面状態である。

「夏希っ、ねえ夏希っ？」

風美が何回も呼びかけるが、反応なし……。

と、風美が何かを思いついたのか俺を手で招いて呼ぶ。

「これ聞いてみてよ」

と、風美に言われたが、いったい何を聞けというんだろっか。風美が指をさしている方向には清水しかいないんだが……。

「耳近づけてみなよ」

楽しそうに風美は笑う。

俺は逆らわずに清水の口元に耳を持っていく。そして聞こえてきた小さな呟き。

「……結婚なんて……まだ出会ったばかりだし、それに悠喜は……

……でも……嫌ってわけじゃ……」

俺は耳を離して、風美の方を見る。

「何も聞こえないんだが……」

俺は聞こえないふりをした。うーんとな、こいつの発言は時たま俺の相手を考えない発言を凌駕すると思うんだ。というか、ツッコミ入れたくなかった。なんで「嫌ってわけじゃ……」なんて言葉が出てくるんだ？ 風美、お前はいつたいどんな魔法を使っただんだ？

「面白いよね、夏希。ちょっとからかえばこんなになっちゃって……。初めて見たよ、さっき聞いたときは笑いそうになったし」

……うん、風美はもう、俺の知ってる風美じゃないんだな。こいつこんなに明るかったつけ？ 確かに明るかったけどここまでじゃなかった気が……。

「とりあえず、清水を起こそう」

覚醒だ。寝てるわけじゃない。現実に戻してやろうという意味だ。

……あれ？ 清水のこれって妄想の世界に入り込んでるとかさういうのなのか？ となると清水はそういう妄想をするような子で、それはつまりそういうことに懂れて……。

「夏希、聞こえてる？」

風美が清水の顔の前で手を振る。それでも起きない、気付かない。「な〜っ〜きッ」

風美が清水の前で両手を思いつきり叩く。パンッ、ととてもいい音が鳴り響く。それとともに清水が「きゃっ!？」と言って立ち上がる。

「……とりあえず、落ち着いて話したいから、風美は清水をからかわないでくれ」

「オーケーだよ」

風美は二つ返事で了承してくれる。一方清水は「え？ へ？ 何のこと？」とおろおろしていた。全くいつたいこいつは何をしてるんだ？

いきなりこんなにぎやかになるとは思わなくて少し混乱していたが、なるべくそれを表に出さないようにしようと思った。だって、

俺はそういうやつだったんだから。感情の変化はあっても、それ外には出さなかった。行動で見せたりしなかった。

この考えも捨てて話を元に戻そう。いや、戻すって言い方も変だな、始めよう。

「とりあえず、風美を呼んだ理由なんだけど」

「！……………ま、まだ十六歳じゃないから……………！」

「引きずってんじゃねえ！」

大声でツツコンでしまう。いや、しょうがないだろ。清水があんなことを言うのがいけないんだ。うん、それと風美の発言も問題なんだ。俺は悪くない。ちなみに男性は十八歳にならないと結婚できません。

「で、単刀直入に言うが、俺はお前と話がしたくて——」

「風美にプロポーズするつもりだったの！？」

「お前はいつまで引きずる気だ！？」

清水が何かわかんないけど壊れたつぽい。いやまあ、これが本来の清水ならそれでいいんだが、清水の一部しか知らない俺としてはキアラ崩壊とかそういう方面で受け取るしかないんだ。

「それで……………えーと、何処まで話したか忘れたんだが……………」

ツツコむことがあるとは思っていなかったたので、予想外のことに反射で反応してしまって、頭に構築していた言葉が吹っ飛んだ。

……………まずは、風美と話がしたいってことからだったよな。よし。

「俺は風美と話がしたくてだな、清水に頼んだんだ。えーと……………」

……………」

まずは何をしゃべればいいんだ？ 話題が思いつかない。いきなりパレルワールドから来ました、とか言ったら痛い子だと思われるだけだし。でも俺は話題なんかそれしかないわけで……………。あつ、一個ある！ まずは……………」

「前に、俺がこの家の前で騒いでた時があっただろ。その、あれはな……………」

……………あれ？ 結局ダメじゃない？ これ俺の今の事情を説明

しなきゃいけないじゃん。え？ どうすればいいんだ？

俺は何をテンパっているのだろうか、と自分で思うのだが、テンパっているわけじゃない。これはただ単に俺の対人スキルが低いだけです。風美だってわかってても初対面として接するとそうしたらいいのかわかんないんです。

「？ あれは何か事情があったの？」

と、風美が訊いてくる。俺は返す言葉が見つかってても信用してもらえないと思うたのでごまかす。

「ま、まあ事情があったんだ。変な誤解しないでくれ」

風美はさつきと同じ調子で「了解」と言ってくれた。

…………… えーと、どうしよう。こうやって一言ごとに次の言葉考えてたら俺の精神が持たないぞ。 えーと……。

「あの、さ……」

と、俺がこめかみに人差し指を当てて唸っているとこう提案してきた。

「まずは自己紹介しない？ 君はあたしの名前知ってるみたいだけど、あたしは君の名前知らないからさ」

そういえばそうだ。初対面ならまずは名乗らなくてはいけなかった。そんなことも思いつかなかったって、俺はどんだけ対人スキルがないんだよ。

「まずあたしから。中川風美、夏希のクラスメイト。知ってるんだよね、多分」

俺は頷く。そして俺も自己紹介することにする。

「俺は清水悠喜。えーと、学校は……この辺じゃないんだ」

俺はそう嘘を吐いた。いや、正直に言っただのかもしれない。俺の通ってる学校は清水と風美と一緒に。でも、この世界とは違う別の世界の学校。遠い場所だ。でも近い場所だ。すごく不思議なことだと思っ。

だが、風美は俺の学校の方はどうでもいいらしく「へー、名前……」とか言っている。名前が一体どうしたっていうんだ？

すると風美は大声でまた爆弾発言した。

「もう籍入れてたんだね！　ってことは結婚式はもうすぐ！？　もしかしてもう結婚式済ませてる！？　済ませてないならみんなに報告を——」

「すみませんマジで勘弁してください清水さんがあの通りまたへたり込んでるんで」

風美がケータイを取り出してなんかメールを打ってるんで本気で頭を下げる。部屋の隅では清水がまたさっきと同じ状況になっていた。いつ移動したんだあいつ。

息継ぎなしで、なおかつ初対面であそこまですらいられた俺をほめてほしかった。っていうかほとんど反射だったけど。

「あーら、夏希はなんでこんなにかわいい反応するんだろう……襲いたくない？」

「微塵も思いません」

俺はすぐさま反射で答える。確かにかわいいとは思ったことあるよ。初対面の時こんな反応する子が本当に要るんだな、と思ったし、でもな風美。襲いたくなるっていうのはどうかと思うぞ。そこまで言ったら犯罪者だ。……うん、俺犯罪者になりかけてたんだよねストーカーとかに間違われて。

風美が俺に笑顔を向けて、また清水を覚醒させるために近づいて行った。

そして今度も俺を手で招いて呼ぶ。そして耳を澄ます。

「……………悠喜と……………結婚……………ッ！……………でも、押し倒されて……………だから責任……………」

「俺は何も聞いてないからなッ！」

俺は清水を指さしながら答えた。頼むから俺を犯罪者だと思わないでいただきたい。確かに最初はあんなことしたけど、全部誤解なんだよ！　だから蒸し返すのはやめてくれ！

俺が必死になって風美を見ると、そこには……

「面白いねっ、悠喜くんって」

笑顔で俺を見ている風美がいた。

この世界で 七

「じゃ、今日は楽しかったよ。また誘ってね夏希、悠喜くん」

「ああ……………また」

「……………」

帰りのあいさつをする。とはいっても玄関まで行くわけにはいかない。ので部屋のところであいさつを終えた。

俺は元氣のない返事で送りだし、清水は無言だった。なぜか、なんて聞かないでほしい。一言でいえば疲れたのだが、話すと長くなるので思い出したくもない。体はいたって健康、元氣もある。問題があるのは精神の方だ。

風美はやっぱり明るかった。テンションが高かった。高すぎたんだ。それにいじられてたんだ。どうなるかわかるだろ。俺はテンションが高いのは得意じゃないんだ。

「……………清水、俺もそろそろ行くよ」

俺はそう言っただけで部屋を出て階段を下っていく。俺はこの家の人間じゃないんだ。だから友達として、帰らなきゃいけない。でも、どうせなら風美と一緒にの方がよかったかな。確かに今日は疲れた。風美がいたおかげで。けど、あんな風に俺をからかうようにして話しかけてきたのは、昔の風美みたいだった。俺がさんざんふざけた対応をしても何度も話しかけてきた。それと、かぶる。

俺は階段を下りながら頭を振る。変にシリアスになったらだめだ、気が落ちていくだけになっちゃうじゃんか。まだだれも帰ってきてないらしいから警戒することもない。清水の母さんは買い物に行ったらしい、今さっき。まるで俺たちを二人つきりにしたかったかのように。

「あ、あのさ……………」

俺の背中から階段を下る音とともにそんな声が聞こえてきた。小さい声だったから聞き取りそこないそうになったが、『この』行動

のおかげで大丈夫だった。

清水は俺の学ランの袖をつかんで俺を止めていた。

「……………？　なんだ？」

続きをしゃべらないので俺から話しかける。

「あ、あのさ…………。悠喜は、どこで寝たりしてるの…………？」

「どこって言われてもな…………」

「ホテル…………とかに泊まってるの？」

「いや、それはないだろ。この辺にホテルなんかないんだし」

「じゃ、じゃあどうしてるの…………！」

清水が驚いたように訊いてくる。あ、もしかして野宿してるのに気づいてそれはさすがに、みたいな感じか？

「もしかしてあたしにやったまいたい——」

「清水……………お前の頭はどうなってるのか不思議だよ」

俺はもつとまともな人だと思ってたんだ。それなのになんでそんな風になっちまったんだ？　俺はこれから誰を頼ればいいんだ？

「じよ、冗談だよ」

ならなぜ焦る必要がある。と口に出したら会話が進まない気がしたのでスル—。

「それで…………。どうしてるの？」

「野宿」

「……………ウソだね？」

「なんで嘘つく必要があるんだ？」

「だ、だって野宿って…………！　寝れないよ！？」

「いや、寝れるって」

「寝れないよ!？」

「二回言っても俺の答えは一緒だからね。寝れるよ」

「それに汚れちゃうし!」

「木の上だからある程度は平気だ」

「汚れ——」

「強調しないでいいから。……………っていつか、いきなりなんでそ

んなこと聞いてくるんだよ」

俺は素直な疑問を口にした。だって清水には俺がどこで寝てるかなんて関係ないんだし、清水が関係あるのは俺の帰還方法であって俺の今の暮らしじゃない。

「だって……なんか気になったから……」

あゝ、そういえば清水はこういうやつだったな。なんかわかんないけど妙に相手を心配する奴だったんだ。忘れてた、さっきのやり取りのせいで。

「気になっても俺が向こうに帰るまで解決しないんじゃないか？」

「え、あ……そう……なんだけ、ど……」

なぜか語尾を曇らせる清水。いったいなんなんだ、これは。

「あの……そうやって……困ってるなら……」

なんだ？ 何が言いたいんだ？ ちょっと待ってる自分で答え求めてみるから。なんて言っても時間は止まったりゆっくりになったりしない。

「一緒に……暮らしても……いい……かな、って」

何だこの展開は。お前は確か断ったはずだよな？ 俺の記憶が正しいならそのはずだ。お前の方は記憶喪失にでもなったのか？ それとも何か？ さっきの風美の言葉で精神に異常が起きたのか？ そうかそうか、だったら俺は帰らないとな、うん。

「また……野宿するの……？」

「……………」

それを言われると、きつかったりする。確かに寝れないことはないんだ。でも、疲れが取れるようにしっかりと寝れるかというと、そうでもない。朝起きると体が痛いことがある。

「……………」

だとしてもだ、さすがにこの申し出は断らなくてはいけないだろう、人として。清水のためにも、ばれたときのことを考えて決めなくては。

「遠慮し——」

「だったら、せめて服とかどうしてるのかとか聞かせて。悠喜、いつもその服だから……」

俺は自分の今着ている服を見る。

学ランに制服のズボン、Yシャツ。何とも模範的な学生スタイルだろうか。いや、スクールバックが足りないか。だが、そんなことはどうでもいい。確かに指摘を受けた通り俺はこっちの世界に来てからずっとこの服だ。清水と会う時だけじゃなくて、本当にこの服のままだ。今までの……二日だったっけな？ ずっとだ。

理由は至極簡単、着替えがないのである。だったら買えばいいじゃないか、と言われてもだ、買った服をどこに置いておくかとか、そういうことじゃない。どうやって買うかだ。

ただ今俺の残金は十円にも届かない。その金額で買えるものと言ったら駄菓子屋で売っている某おいしい棒を買うことしかできないあと五円玉を模したチョコレートも買えるか。どっちか一つだけだ。そして驚くことに、この二日間ずっと着替えていないということだ。着替えがないので当然着替えてないんだ。自分の匂いは自分では気付けないらしいから、たぶん俺はやばいのではないだろうか。夏場じゃないのだけが救いだった。夏場だったらもっと汗かいてるだろうから相当だっただろう。

「……あんまり気にしないでいいぞ。俺のことだしさ」

この言葉の意味は、気を使っているんだったら気にせずに言うてほしいという意味だ。さすがに清水も女だから匂いとか気になるだろうし。

「元の世界に戻りたいんでしょ？ それは悠喜のことじゃないの？」

「……………」

それもそうなんだ。元の世界に戻る、っていうのは完全に俺の問題であって清水の問題じゃない。清水は別にかかわらなくても——俺に協力しなくてもいいのである。ただ、協力してくれないと俺が困ってしまうわけで……。

「ちゃんと困ってることは言うてほしいの。協力するのは悠喜が元

の世界に帰れるまでだから、その間は隠し事はあんまりしないほうがいいと思うし……」

うーん、それもそうなのかな？　なんか反撃できる気がするんだが……。これ以上何か言ったら最終的に協力しないと言われるそうだし……。

「……分かった。話せばいいんだろ」

俺は仕方なく、しぶしぶ今の状況を話した。

「……。以上だ」

「分かった。まずはお風呂に入った方がいいかもしれないから……入ってくる？　シャワーだけになるけど……」

はい、やっぱりそうなりますよね。わかっておりました。ですがね清水さん。

「俺は今着替えを持っていないんだが……」

「とりあえずもう一回さっきの制服に着替えてもらっ、そのあと買い物に行こうよ。そうすれば大丈夫だと思うから」

清水の頭の中で何が大丈夫になったのかわからなかった。が、しかし。清水が何をしようとしているのか大体はわかった。とりあえず俺を風呂に入れて、その後買い物をする。その買い物は多分……。

「……買い物って、何買うんだ？」

予想はついていたが、念のために確認。

「そ、その……悠喜の服を買いに……行くんだけど……。どうして？」

なぜか頬を赤く染める清水。こればかりは俺じゃなくてもわからないってしてくれるだろう。な？

だから俺はストレートに聞く。

「なんでそんなに赤面してるんだ？　別に恥ずかしいことは何も――」

「だ、だってっ、あたしの服買うのに付き合ってもらっなんて……考え……たら……。下着とかも買っし……」

「おっ、廃品回収車だ」

この世界でもフツーにあるんだよな。全部俺のいた世界と同じだ、うんうん。観察は大事だよな。

うん、逃げたんだよ。逃げるしかないんだよ。俺の対人スキルは低い、つまりだ、こういう会話がでてきたときにどうしたらいいのかが分からない。本心ではかわいくて抱きしめたいとか変態チックな男子的なことを考えていてもだ。それを行動にしたらダメなのはいい加減学習した。だから、逃げることしかできないんだ。

「つ、つまりねっ、着替えくらい何個かあった方がいいと思うし、だから買いに行こうってこと、なんだけど……」

清水の声がだんだん小さくなっていく。

「どうした？」

「その………お節介、なのかな………やっぱり………」

そう言っつてうっむいてしまう清水。なんでそんな悲しそうな顔すんだよ。俺は対人スキルが低いんだよ、こういう時どういう風にすればいいかわかんねえから……。

「別に………いいと思うよ。俺を助けようとしてくれてんだし」

ラノベとかに出てくる主人公みたいな言葉しか浮かんでこねえんだよ。

こういう優しそうな言葉が俺に似合うとは思わないけど、これ以外に浮かばなかったのだから仕方がない。自分の対人スキルの低さを恨みたい。なんかこう言うセリフが優しいセリフだとか、かっこいいセリフだとか理解して言うのって、すごいナルシストみたいじゃん。すごく嫌だ。めっちゃ恥ずかしい。

「でもさ、俺は金持ってないんだけどさ………」

そこまで言っつて気付く、これを言ったら買っつてあげるから大丈夫って感じになるだろう。そこまでさせちゃうとさすがに……。ってか、こういうのは立場が逆だろ。フツーは男が女に何かを買っつてやるもんだろ。

そんな風にどこかのラノベで使われてたな、と思うようなことを実際に思っていた。

「あたしがお金払うから大丈夫だよ」

やっぱりな。予想に反さずにしっかりと告げてくれた。

「でも、お前の金だろ？ あんまり使っちゃ悪いだろ」

「あたし普段あんまりお金使わないから大丈夫。こういう買い物とか一回やってみたかったし」

「こういう……？」

誰かと一緒につてことか？ そんなの清水なら俺と違って友達と……ッ！ そういえば、清水も、俺と同じだった。風美だけだったんだ。本当に、風美だけが友達なんだ。

清水は笑顔でいる。楽しみにしているのだろう。俺なんかと買い物に行くのがか？ 少し自分を過大評価しすぎな気がする。……ただ、もしも清水が本当に楽しみにしているとしたら、俺はただ代金を払わずだけのために清水と一緒にいくなんで、しちやいけないと思う。これはラノベとかでも使われるような思考回路だろうけど、今はそんなんじゃないかと本心だ。自分と同じような立場だった清水に、同情してる。そんなこと主人公が言うもんじゃないけど確かに俺は同情してる。きつと。

「なあ、清水。買い物終わったら、軽く遊ぶっていう風にしないか？ そうすれば俺は喜んでお前の申し出を受ける」

俺がそう提案すると、清水はさらに笑顔になる。無邪気な、子供みたいな笑顔。

「うんっ、それでいいよっ」

声もさつきよりもさらに明るく、弾んでいる。尻尾はないけど、犬みたいに喜びを表現するのがうまいな、と思う。見方を変えれば、自分の感情を隠すのが苦手、という風にもとれるかな。前の赤面とかを見てるとそれがよくわかる。まあ、原因は俺らしいんだけどな。素直に認められるのと認められないのがあるが。

「じゃあ、お風呂入ってきてっ。タオルとかは今準備するからっ」
すごく楽しそうに階段を下りていく清水。なんだか、すごく平和だな、と感じられる光景だ。さてと、俺も下に行くかな。そういえ

ば家の人とか大丈夫か？　って、さつき母さんが買い物に行って誰もいないって確認しじゃんか。バカだな俺は。

俺は学ランを脱ぎながら下に向かった。

なんで今まで学ラン着っぱなしだったんだ？　室内なのに。と思われるだろうが、結論はいたって簡単。置く場所がなかったんだ。あの部屋はあくまで清水の部屋だ。勝手ににおいていいのかどうかわかんなかったんだ。

「お風呂場のところにタオルとか置いたから、使ってねっ」

と、下から声が。まだ俺階段下りてる途中なんだが……。行動が速いこった。

「ありがとう」

俺は一応小声でお礼を言ってから、風呂場に向かった。この家は俺の家とほぼ一緒なので風呂場の場所はわかる。便利だな。思いながら俺は風呂場に向かった。

ってか、清水どこ行ったんだ？

この世界で 八

風呂場に行くと清水がいて、清水は衣服は一切着用していなかった。なんてことは起きるはずもなく、俺はフツーに平和にシャワーを浴びていた。……平和にシャワーを浴びるってなんだ？ 表現としておかしくないか？ まあ、いいや。

二日ぶりのシャワーはとても気持ち良かった。湯船にはつかれなけれど、シャワーだけで十分すぎる気がした。なので俺は二十分ほどシャワーを浴びていた。

その間に考えていたのは、いろいろなことを考えていたので一言では説明できない。

まずは、清水のこと。清水夏希、俺との共通点はあった。風美だけが友達だという点、対人スキルが低いかもしれないということもある。でも、それ以外は今のところ共通点はない。

だが、真逆な部分もある。まずは言わずもがな性別。そして思考の終着点。あいつは楽しいことを結論として出す。俺の何もかもを否定するような思考ではない。

それに、人のことを気に掛けるということも俺とは違う。俺が今こうやって協力者を手に入れたのは、清水がそんな性格だったということ。俺だったら昔風美に対してしていたように、無視をしていただろう。関わるのはめんどくさいから相手にしない、と。

清水とは真逆だ。

考え方、つまりは根源的な人としての性格が違う。

身体的な能力についてはまだ全く分からない。学力も同様にだ。

ただ、一つ気になったことがある。風美だけが清水にとっての友達、それに間違いはないだろう。俺と同じで。

なら、昔はどうだったのか、ということだ。俺が風美と出会ったのは高校に入ってからだ。清水はどうか知らないが、もしそうだったのなら、中学、小学の時の友達は今どうなっているのか、というこ

とだ。

母さんの話にもあつた通り、みんな清水から離れて行つたのだろうか？ 清水がきつい態度をとったから。それとも、風美みたいな奴がいたのだろうか？ 風美みたいに、清水にきつい態度を取られても逃げなかつた奴が。

そしてもう一つ。昔の友達、それは俺の知っている人たちなのか。俺が今まで中学小学と、一緒に過ごしてきた友達と同じ人物なのか、ということだ。二つの世界があると話がややこしくなるが、ゆつくり考えれば大丈夫だ。

俺だつて、一応は中学の時に友達はいた。何十人というほどではなかつたが、仲のいいグループが。ほんの何人かで固まっていた。

それに対して、清水はどうだったのか。中学の時の友達はいたはずだ。清水から友達が離れて行つたと話にあつたのだから。

その友達も、全員が全員、清水のもとから離れて行つてしまったのだらうか？ 中には、いたのではないだらうか、ずっと清水のこゝとを友達だと思つていた奴が。

自分と清水、二人を比べるなんてことに意味があるのかは分からない。ただ、可能性があるからやつてるんだ。俺のバカみたいな妄想かもしれないけど、同一人物であるなら、本物の同一人物。

つまり、何らかの方法で俺、清水悠喜という人間はもう一つの個体を作り出した。清水夏希という。そしてあるうことか、自分であつたはずの清水悠喜という存在が消えた。

……いや、消えたというより、盗まれたという方がいいのか。

俺が存在していたという事実がすべて清水夏希へと移動してしまい、その結果、現実で存在していたという記録を清水夏希に奪われた俺——清水悠喜はこの世界に存在していなかつたことになってしまつた。というのが、俺が今さっき思いついたことだ。

もちろん、俺はこれが確実に元の世界に変える方法だと思つてゐるわけじゃない。さっきも言つた通り、あくまで可能性があるから案の一つとして入れているわけだ。

俺はシャワーをもう一度頭からかぶる。水道代とか大丈夫かな？
そんな心配をしているが、表面上だけだ。もう一つ、考えていたことがある。

中川風美。俺のもとの世界での現在のたった一人の友達。

俺は風美も比べていた。風美と、風美を。

この世界の風美は、自分の元いた世界の風美と違うのではないかと。思っている。俺のいた世界での風美は、明るくて、俺によくからんできて、たまによくわからない反応をする奴だった。なぜかいきなり焦ったりな。

だが、この世界の風美は違った。俺に絡んでこないのは初対面だからフツーだろう。そこは今は関係ない。このことでも俺が言いたいのは性格だ。

この世界の風美は俺のいた世界の風美と比べて、明るい。活発だ。俺の世界の風美もさっき言った通り明るかったが、こつちの世界の風美はどうもそれが極端な気がする。

清水の性格もこの世界の風美の性格も、まだ全部わかったわけじゃない。本当は風美は何も変わったところなんかないのかもしれない。俺が初対面なのに同じ対応を……元いた世界と同じ風美みたいに接してくれるわけではない。その時間の差なのかもしれないだろう。二つの世界の違い、それが少しずつだけ見えてきてる気がする。帰るためには、何かをしなくちゃいけない。その何かを見つけるために清水という。自分でも少しおかしいことだと思う。誰かに協力してもらってるなんて。

俺はそろそろ出ようかと思い、シャワーを止めようとした。

「……はあ、疲れたなあ」

……誰かが脱衣所に入ってきた。いやね、もちろん清水夏希さんでないことはわかっておるのですよ。あの人は俺が入ってるの知ってるんだし、それでもなおかつ入ってくるようなお馬鹿さんではないのですよ、多分。声からも清水じゃないことはわかるし。

でもね、この声はさ、男性ではないのですよ。うん、男性じゃな

いなら両性……いい加減逃げてても現実是不変らないってことを理解しろ、という声が天から聞こえたので正直に今俺が理解していることを祖直に告げる。

今脱衣所にいるのは七海だ。

ちようど七海の声が聞こえたと同時に俺はシャワーを止めたのだから、あいつは中に誰かが入っているということに気付いていない。緊張感が高まっているせいなのか、五感がものすごく敏感だ。

……つまりな、七海の服を脱ぐ衣擦れの音がものすごく大音量で聞こえるわけだ。いつもならな、妹だから問題ないという風にここから「今入ってるぞ」という風に声をかけられるのだが……。考えてもみる。今俺と七海は赤の他人だ。その赤の他人が自分の家の風呂でシャワーを浴びていたら……どうするよ？ 通報だよな、もちろん。

別に七海の体を見て動揺するというわけでは無い。ただ俺が動揺しているのはそういうことだ。どうするかな……。

「あつ、服もってくるの忘れてた」

ああ、よかった。これで俺は逃げられる……。なんて思ったら大間違いだったりするぞ。七海が俺の知っている七海ならな、ここです結論はとてつもなくバカなんだ。

「……Yシャツでいいかな？」

ほらな？ あいつはそういうやつなんだよ。ってか、七海は学校帰りか？ あいつ運動部じゃないのに疲れたって言ったぞ。いったい何してたんだ？

なんて考えていたら、タイムリミットが来たらしく、風呂場の扉が開く。

……でだ、この風呂場から離脱する方法は何かあるか？ 窓から外に出るか？ 一応腰に巻く程度のタオルならあるが……。出口って言うたらな、窓しかないんだよ。

窓、つまりは外に出るということだ。……通報確定だな。その選択肢はない。

じゃあ隠れる場所は？ 簡単だ。もちろんない。こんな風呂場には隠れる場所なんて……………ないなら作ればいいじゃない。ということとで俺はからの浴槽の中に入り、上から浴槽に使う蓋を乗せて、回避を図る。かくれんぼなら得意だ！ と、言い聞かせる。

これなら問題はない。七海がシャワーを浴びている間だけだ。ばれることはないだろう。

ぺたぺた、と裸足でタイルを歩く音が聞こえる。緊張感恐るべしである

そして当然のごとくシャワーの音が聞こえ始める。うん、大丈夫だ。どこかの主人公ならここでモノ音を立ててしまい——くしゃみなど——ばれるというのがお決まりだが、俺はそんなバカなことはいらない。

「……………あれ？ もうお風呂入ってるのかな？」

「ッ！？」

俺の頭でパトカーの音が鳴っていた。サイレンである。これはもちろん俺が逮捕されたときに聞く音だろう。つまり予知。あはは、能力に目覚めたよ、よかった。

……………現実逃避している場合ではない。いま、七海はなんて言った？ 「あれ？ もうお風呂入ってるのかな？」と言っただろう。これは簡単に言うとな「あれ？ もう浴槽にお湯沸かしてあるのかな？」という文面と同義である。

つまり、こいつは浴槽に蓋がかかっていたことで、浴槽にはもう既にお湯が入っていると勘違いしたのだ。……………いや、まだそこまで行っではないか。でも、絶体絶命なのに変わりはない。

ここで七海がとる行動を予想しよう。……………蓋を取る、この一択だった。七海は絶対に確認のために蓋を取る。そしてなかをチェックするだろう。それはつまり、俺が発見されることを示している。このかくれんぼは恐怖である。

「……………」

俺は息をひそめるが、蓋がとられるのは回避できるはずもないん

だ。オープン。

「……………」

「……………泉の精です」

体育座りでさらに縮こまった状態で顔だけ挙げて七海に向かっていた。え？　何が起こったのかって？　最近分かったんだが、人つてさ、テンパったりすると変なこと言ったりするんだよ。今の俺が
いい例ね。

「あ……………やあ……………」

七海、涙目になるのは構わないが、一つアドバイスだ。この場合は——あくまで俺はこいつとは他人なので体を隠した方がいいと思うぞ。左手にシャワーを持って、右手は蓋を開けたため、体を隠すものが全くないんだ。タオルはシャワーを浴びてたから無理だからな、腕くらいしかないんだよ。だから、隠した方がいいと思うぞ。

「いやあああああああああ！」

ものつすごい悲鳴が近所に響き渡っただろう。女の子独特の甲高い声が風呂場内にも反響して、耳が痛くなる。耳ふさいで何とか抵抗。

悲鳴を上げると七海はようやく両腕で体を隠した、それプラスしやがんでガード。そのせいで浴槽用の蓋がタイル床に落ちる。シャワーまで落としやがった。

とりあえず俺はこのまま風呂場を後にするのはさすがにどうかと思っただけで脱衣所にいったん行き、タオルを取ってきて七海の前に差し出す。

「ほら、とりあえずタオルの方がいいだろ」

俺が差し出したタオルを取ろうとして、止まる。

「どうした？」

「……………向こう向いて」

睨みながら俺に言う七海。いやさ、兄に向かってその視線はないだろ。兄じゃないんだけどさ。

俺は七海の頭の上からタオルをかける。そしてそのまま俺は脱衣

所に向かう。

俺はもうシャワーを浴び終わっていたのであとは出るだけだったんだ。

「変態ツ！　なんで人んちのお風呂場なんかにいるのよ！！」

いやさ、確かにここは七海の家だけどさ、俺は清水に許可を取っていたわけで……そして脱衣所に俺の制服があることに気が付かなかった七海にも非があると思うんだ。

まあ、ここでいろいろ言い合っても仕方ないっていうのはわかってるんだよ。だから俺は一言だけ言って風呂場と脱衣所を繋ぐ扉を閉めることにする。

「お前、いい加減裸＼シャツやめた方がいいぞ」

「ツ~~~~~！？」

七海は顔を真っ赤にしていたが、構わず俺は扉を閉めた。こういう時はほっておくのが一番。え？　なに？　俺のせいだって？　俺はアドバイスしたただけぞ。

だが、俺がせっかく出てきてやったのに七海の奴、わざわざ扉開けてきやがった。

「変態！　今通報してやるからね！！」

そう吐き捨てるように言うと、廊下に出て行くこととする。……………

……。

「きゃッ！！」

……………え？　俺は何もしてないよ。ただ手首をつかんだだけだ。通報されたら困るからそれを食い止めただけだ。他意はないから安心しろ。そして泣きそうになるな。マジ頼みますから。今の光景傍から見たらやばいからね？　二人ともタオル撒いてるだけだからね？　それで女の方は半泣きだからね？　清水の時と同じ感じだ。デジャヴ。

ぼたぼたと七海の髪から水滴が落ちる。それと同時に瞳からもおおいおいおいおい！　ガチ泣きはやばい！　さすがにやばい！　「七海、落ち着いてくれ！　これにはわけがあつて——」

「やだっ！」

七海はそう言って必死になって俺から逃げようとする。

「ちよっと待って！ そんなに暴れると……」

女子のバスタオルをもくという行為、これはとてつもなく危険なということを知っているだろうか。何が危険いかというのだ、激しく暴れると簡単に取れてしまうということだ。まあ、撒いてるだけなんだから仕方がないことなのだろう。でも、今はそういうことがあっちゃいけないと思う。

「落ち着けて！ 七海！」

「いやっ！ ヤダ離して！」

「だからそんなに暴れると——」

……ばさ。

………ほらな、やっぱりこういうことになるんだ。二人とももちろんフリーズ。そして俺はその床に落ちたタオルを拾う。で、七海に向かって投げる。女の子として、裸を見られるのは恥ずかしいらしいからな。まあ男でも全裸なら恥ずかしいか。異性に見られたなら。

とりあえず俺はしゃがんで七海にタオルを投げる。

俺の投げたタオルを使って体の前だけを隠している七海を放置して、俺の制服やらYシャツやらをつかんで脱衣所を出る。ここで誰かに発見されようものなら俺の人生は本当に刑務所行きに乗り換えたことになってしまっている。

俺は素早く脱衣所の前で制服を着る。急いで体を拭いて着ただけなので、髪の毛から水滴がYシャツに落ちる。それで、俺が今するべきことは……。

「清水の部屋に行こう」

俺は清水の部屋に向かって階段を上って行った。

七海……通報しないでくれるかな……？

この世界で 八（後書き）

楽しみにしてくださっている方、更新遅れてすみません。
よろしかったら感想などお待ちしておりますので、気軽に書き込んでください。

この世界で 九

「……………」

「……………」

無言で睨む少女、その視線に気づきながらも言葉を発しない高校男子。そしてその少女に盾として使用されている姉。まるで俺がいじめてるみたいじゃないか！

俺は別にその少女——七海をいじめてるわけじゃない。ただね、さっきのことがあったから俺のことを警戒しているらしく、姉——清水の後ろに隠れているわけだ。

高校男子はいつもと変わらない表情でその視線に自分の視線を合わせるだけ。

「…………… あ、あの……七海？ 何があったの？」

「……………」

七海は姉の言葉も聞かずにただ高校男子こと俺のことを睨み続けている。

…………… えーと、そんなに俺はいけないことしたのか？ 裸を見るくらいなあ……………俺からすると妹の体には興味ないし……………。

俺は必死に自分の中で言い訳をする。情けないなあ俺。

「……………これ、おねえちゃんの友達なの……………」

俺を指さしながら七海は清水に尋ねる。

「そ、そんなところ……………どうかしたの？」

清水はどうやら今のこの空気を理解していないようだ。まあ何が起こったかすら知らないんだから理解も何もあつたもんじゃないだらうけど。

「……………おねえちゃん……………」

と、七海が体をプルプル震えさせてうつむく。え？ なんでそんなに体に力が入っておらっしゃられるんですか？

そして七海は顔を上げると同時に、親の仇でも見つけたかのように殺意を放ちながら俺をもう一度指差す。頭の上から振り下ろす感じで。

「こんな人とかかわっちゃだめ！　こんな変質者すぐに警察に突き出さないでだめ！」

変態から変質者にランクアップしたけど、それはひとまず置いてだ。

「こんな人って……俺は一応——」

「ストーカーで変質者な変態でしょ！！」

「なんでそこまで言われなきゃいけないの！？　俺はフツーに風呂に入ってただけだろ！？　それにストーカーじゃねえ！」

風呂に入っていた経緯を説明しようとしたが、無理だった。ツツコまなきゃいけない気がした。

「他人の家でお風呂勝手に入って、よくそんなに開き直れるね……」

「！」

「いやまて！　許可は取ってあるから！　清水に許可取ったから！」

「あたしはいいなんて一言も言っていない！！」

「なんでお前の許可が必要なの！？」

むしろ七海が俺が風呂に入ってるのを確認しないで入ってきたのがいけないと思う。

「……………それを言ったところで、俺のこの状況が好転するとは思えないな……」

「それにあんたは！　あたしが普段どんな格好してるかまで……ッ
く！」

えーと、裸＼シャツで家をうるついてるってことか？　いや、あれはさすがに忠告した方がいいと思ったただけなんだが。それに今まで一緒に暮らしてたわけだし。

ちなみに今の七海の服装は白いＴシャツに灰色——それともネズミ色？　あ、同じか——のショートパンツという格好だ。裸＼シャツはやめたらしい。えらいぞ。

「つてか恥ずかしがるなら裸Yシャツ普段もやめろよ。それと下着の上に大きめの上着を着るだけっていうのもやめとけよ」

「ツ~~~~!？ もうヤダッ！ おねえちゃん！ 通報しなきゃだめだよ！」

「ちよつと七海落ち着いてっ」

清水が何とか七海をなだめようとする。

「なんでおねえちゃんこの人かばうの!? ツ!? もしかして何かされた!? 脅迫みたいなことされたの!?」

「え!? そ、そういうわけじゃないよっ、だた……」

……清水、頑張れっ。俺は心の中で静かにエールを送ることにする。

「この人がお風呂にいたのはあたしが入っていいよって言ったからなの。そこは誤解しちゃダメだよ」

「……………本当に?」

「だからさつきから——」

「あんたには訊いてない!!」

……………なんか俺、妹に怒鳴られるって……………悲しい……………

…。

つてか、こつちの世界の妹性格きつくないか? 向こうではただの天然さんだったぞ。こつちの世界じゃ思いつきり強気のツンデレ娘みたいじゃねえか。

「それに、仮にそれが本当だとしてっ、なんであんたがあたしの私生活知ってるのよ!!」

「……………」

あ、これってあれだね、絶対絶命ってやつだね。素直に俺がお前の家族で兄だからです、なんて言ってみろ、本当にやばい人だ。少なくとも七海は俺がそういうことを望んでる痛い人だと思うに違いない。これは本当のことなのに!

ほかに何かいい言い訳は……………。実は向かいの家のものです、とか? ……………。いやいやいや! それって結局ストーリーカ

「じゃん！ 覗いてるじゃん！ 犯罪者じゃねえか！ 言い訳でもなんでもねえよ！ ただ罪認めてるだけじゃんか！

ほかにっ、何かほかに言い訳はないか！？」

と、俺が一生懸命言い訳を探していると、

「それはね、あたしがしゃべっちゃったの。家族の話をしようってことになったらつい……………ごめんね七海」

ああ清水さん、今日はあなたの奴隷になっても構いませんよ、俺を助けてください。もつと俺の無実を証明する証拠を……。

「でもっ、あたしに襲い掛かったし！」

「待て待て待て待て！ 俺がいつ七海に襲い掛かったんだ！？」

「さっき脱衣所で襲ったじゃない！！ あたしは絶対に忘れないから……！」

おいおい、それは心当たりがねえぞ。俺がこの世界に来たとき清水にしたみたいなきをしたのならわかる。でも、俺は今回何もしてないはずだ。って言うかな、俺はお前にタオルを渡したはずだぞ？ 正常な反応をしたはずだぞ？ 襲うなんてことはしてないはずだぞ？

「……………悠喜……………」

これには本当に困ったような表情をする清水。ああ、前科がありますものね、はい弁護はないと諦めますよ。ああ、俺はこんな世界で一生を終えるのか。それも牢獄の中で。

「ほらっ、反論できないんでしょ！ 変質者！ 自殺しろ……！」

ああ、なんか妹にこんなこと言われるの辛いもんだな。っていうか、本当に襲った覚えがないんだが……。

「俺が何をしたんだ？」

「とぼけないで！ あたしの手首つかんで押し倒そうとしてたくせに……！」

「してねえよ！？ 手首はつかんだけど押し倒そうとはしてねえよ……！」

わかった、こいつの中で話に尾ひれがついてる！

清水に目で訴えかける。こいつの言ってることは嘘だ、と。いや、本当のことと言ってるんだが、嘘の部分は訂正しなきゃヤバイ。

「七海？ それは本当に本当のこと？」

「え？ なんで？ あたしは本当の——」

「なんかね、尾ひれがついてる気がするんだけど……」

「清水、ありがとう本当にありがとうございます。俺の視線だけでちゃんと気づいてくれるなんて、自分、うれしくて涙が出るっす。」

「た、確かに大袈裟に言ってるところもあるけどっ」

「大袈裟じゃなくてでっち上げてるだろ」

「く~~~~ツ！」

「なんか、悔しかったらしい。何が悔しいんだ？ 凶星だったからか？」

七海は嘘がばれて赤くなりながらも俺を睨むことはやめなかった。

……………俺はどうすれば？ なんかいい言葉浮かばないかな？

対人スキルの低い俺はやっぱいい言葉なんか浮かばない。浮かんだ言葉は、口に出していいのかどうかわからなかった。

「……………やっぱりヘン！ こんなにあたしのこと知ってるのは絶対ヘンッ！」

七海は負けたくないのか、肩に——全身に力を入れながら言う。

「さっき清水も言っただけど、俺が清水と話してる時に——」

「それにしても知りすぎなのッ！ 今まで一緒に暮らしてなきゃわからないことまで！」

おお、なんと的を射た答え。その通りだ、俺とおまえは兄妹なんだ。思い出したか？ なんて言っても思い出すとかいう話じゃなくて、この七海は俺の知ってる七海とは別人なんだ。こんなことを言えるほど俺はバカじゃない。

とりあえず、こいつはなんとしても俺が悪いという風にしたいらしい。別に俺はそんなに……いやね、俺も悪いんだけどね、それ認めたら絶対お迎えが来るでしょ？ 電話一本で、あのホワイトカー

に乗ってさ、俺にブレスレットをつけてくれるんだよ。

だから俺はこういうしかなかった。

「さっき清水が言った通り、話に出てきただけだ。俺が一体お前の秘密の何を知ってるっていうんだよ」

「べ、別に秘密なんかないわよ……」

七海はそう言ってそっぽを向く。いやね、秘密がないならもうこの話は終わりでいいんじゃないかな？　ずっと攻められ続けるのは結構効くんです。

「それにあつたとしても絶対に言わないッ！」

七海はよくわからないが強気に言う。少しは落ち着いて話をしたいんだが……。

「あと、あんた！　おねえちゃんとどういう関係なの！？　まさか

……恋人！？」

「それはないから安心しろ」

「ツ~~~~！」

俺は冷静に事実を伝えるのだが、清水の反応を見るとそれが無駄になってしまいかねない。なんで赤面するだけでだまっちゃうんだよ。ほら、七海だってあんな目してる。

もちろん清水が自分を主体とした恋愛話的なことが苦手なのはわかってる。けど、少しくらい受け流すということ覚えてもいいと思うんだ。

「おねえちゃん、これは忠告だから真剣に聞いて。……こんな変態と一緒にいちゃダメ！　変な要求とかされちゃうかもしれないし、襲い掛かれちゃうかもしれないんだよ！　おねえちゃんが嫌がっても男の人の方が力が強いんだから！」

七海さん、大変申し訳ないのですがその辺には触れないでください。もしかしたらさらに清水が赤面して、七海の疑いが深くなつて刑務所送り、なんてことになりかねないんで。

それに清水さんも、俺の心を読んだように赤面し始めないでください。さっきから赤面が続いているけど、もう赤面と呼べなくなり

そうですよ？ 首のどこまで真っ赤じゃないですか、服脱いだら全身真っ赤なんじゃないですか？

と、いつものように現実逃避をしても結果は変わらない。より一層赤くなつた清水を見た七海は俺の予想通りに、

「あんたもしかしておねえちゃんにもう何かしたの！？ 最低ッ！」
もうつて、することは確定していたんですね。どれだけ俺危険人物扱いされてんだよ。

七海は続けて俺に怒声を浴びせる。

「どうせあんたみたいな変態は体目当てなんでしょ！？ 相手の気持ちなんて考えないで遊びのつもりだったんでしょ！ ホント最低！ 男子なんてみんなそうっ！」

七海さんや、俺を変態呼ばわりするのはいいが、男子全員を敵に回す発言はどうかと思います。ほかの男子が訊いてたらものすごい恨み買つてますよ。……………あれ？ そんな風に思われたのは俺のせいだからって俺に恨みをぶつけられる可能性だつてあるんじゃない？。やばい、寒くなってきた。いや、もともと冬場だから寒いんだけど。

そしてもう一つ言いたいことが。七海、おねえちゃんの気持ちも考えずにいろいろいつてるのはお前の方だからな？ 自覚しろよ。今清水が赤面してるのお前のせいだぞ？

「早く出てけ！ 女心のわからないケダモノッ！」

変態からさらにランクアップして、ケダモノになつたみたいだ。この短時間で俺が人間として最悪な立場に…………ケダモノとか、漢字変換したら獣じゃん。人ですらないじゃん。

俺は心に傷をおつた。なんか、この世界の七海、キツイ…………。それに女心分かつてないとか言われたし、わかるわけないだろ！俺は女性関係なんて縁もゆかりもなかったんだからな！ それにその発言、清水が俺に好意を寄せているっていうのを前提にしないという意味がないからな！

「早く出てけ！ もうおねえちゃんに近づくなー！」

ボロクソ言われて、ここにとどまっていられるはずもなく、俺は七海の怒声を背に出ていくことしかできなかった。その対応しかなないだろう。誰でも。

俺は夕方を過ぎた凍てつく住宅街へと放り出された。うゝ、寒い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0340v/>

こんなもの信じるか！

2011年11月13日21時28分発行